

大窪詩佛『卜居集卷之上』注釈

山口 旬

本稿は、大窪詩佛の第一詩集『卜居集』二巻のうち上巻の注釈を試みたものである。『卜居集』は、後に『詩聖堂詩話』に語られるように鷹野魯屋などの資金協力を得て、寛政五年に出版されたもので、詩佛の初期の詩風を伝える詩集である。また、詩佛の詩だけではなく、当時の詩友である中野素堂の評評も多くの詩に附されており、当時の詩佛とその周辺の詩に対する考え方や作詩事情などが表れおり、それも興味深い内容になっている。詩佛は時に二十七歳で個人詩集として異例とも言えるほど早い出版である。多くの詩人が習作期の作品を残さないように、詩佛も既に三十三歳の『詩聖堂詩話』で『卜居集』刊行を後悔する旨を書いている。それだけに詩佛の詩風の変遷を知るには絶好の資料といえる。

〔凡例〕

○本稿の底本は、国会図書館蔵の二本のうち乙本（詩文3391乙）を用いた。

○山本北山の序文が附されているが、本稿では省略した。

○詩には便宜的に通し番号をふった。

○詩と評は、白文（便宜的に句読点のみ附した）・書き下し文・訳文を示し、語の解釈もできるだけ訳文の中に含めるようにした。訳文だけでは示しづらい語注や典拠などは○でしめし、さらに全体に関わるような説明は◎でしめした。

○書き下し文は、原本の訓点を生かしながら私に訓読した。

柳垞先生著／卜居集／素堂先生評 文刻堂

卜居集卷之上

常陸 柳垞大窪行 天民著撰

伊勢 素堂中野正興子興批評

武蔵 晋岱井 敬義伯直校訂

1 卜居

宅向雲林烟浦移

宅は雲林烟浦に向て移る

吟眸且喜十分奇 吟眸 且つ喜ぶ 十分の奇なるを

新窓夜半聞潮落 新窓夜半 潮の落るを聞き

舊樹朝來判曉遲 舊樹朝來 曉の遅きを判ず

依浪輕鷗猶未熟 浪に依る輕鷗 猶ほ未だ熟せず

賣醪老叟已相知 醪を賣る老叟 已に相知る

一身従は何嫌瘦 一身 是より何ぞ瘦るを嫌はん

觸興時時改舊詩 興に觸て 時時 舊詩を改す

清新圓熟柳垞本色。前聯絶好。柳垞常謂佳句易得而佳詩難得也。圓熟之難也、諸體莫不皆然而至七言律最極矣。此詩第一句述移家、次句贊其景、三四分承雲林烟浦、四五一転言其事。七之句有安其所而足以終身之意焉。従是二字多含蓄、末句觸興改詩見其事與其景相称也。是應上十分奇。以結一篇也。得七言律體可謂能酬其言也已。

清新圓熟、柳垞の本色。前聯、絶好。柳垞、常に謂ふ「佳句は得易くして佳詩は得難きなり」と。圓熟の難きや、諸體、皆然らざること莫し。而して七言律に至つては最も極なり。此の詩、第一句、家の移るを述ぶ。次句、其の景を贊し、三四、雲林烟浦を分承し、四五、一転して其の事を言ふ。七の句、其の所に安じて以て身を終ふに足るの意有り。「従是」二字含蓄多し。末句、興に觸れ、詩を改し、其の事と其の景と相称ふを見るなり。是れ應に上十分の奇なるべし。以て一篇を結ぶなり。七言律體を得て、能く其の言に酬ふと謂ふべ

きなるのみ。

【訳文】居を定める

住まいを、雲のかかる林、鶯のかかる浦の辺りに移した。詩人の眼から見て、また風光が十分に素晴らしいのを喜んでゐる。新居の窓からは夜中に潮の退く音が聞こえ、古くからある木は鬱蒼として、朝日の昇るのが遅いのが判る。波間に浮かぶ軽やかな鷗とは、まだなじみになつていないが、濁酒を売る老翁とは既に知り合ひだ。これからどうしてこの身が詩作で瘦せるのを厭おうか。興に觸て、時々、旧作の詩を推敲しよう。

清新にして圓熟した表現は、詩佛（柳垞）の持ち前である。前聯は非常によい。詩佛は、常に言つている「よい句は得易いが、よい詩は得難いものだ」と。円熟し難いのは、どの詩体も、皆そうでないものはない。しかし、七言律に至つてはその極みである。この詩は、第一句で、家の移るを述べ、次句で、その景を賛美し、三四句で、雲林烟浦をそれぞれ分けて承け、四五句では、一転してその人事を言う。七の句では、その土地に満足して、身を終えようという意志が見える。「従是（是より）」の二字が含蓄深い。最後の句で、興に觸れては、詩を推敲する、と言ひ、その人事とその景色と調和させた。これは正に（詩中の語の「十分の奇」以上の）「上十分の奇」と言えよう。そして、一篇を結ぶのである。七言律詩体で、その詩体の性

質を生かし切つたというべきである。

○卜居 地相を占つて住むところを定める意で、実際に詩佛が詩人として独立し転居したことをさす。 ○雲林烟浦 詩佛の新居、既

醉亭近辺の品川・高輪あたりの風景をさす。 ○吟 「詩人の」の意味を表すのに様々な語に接頭語的に付く。 ○依浪輕鷗 鷗は邪

心のない者と親しむという。盟鷗の故事。『列子』 ○瘦 「瘦」は詩佛が多用する、自分自身の詩人としての姿であるが、元來は李白の「戲

贈杜甫」の「借問別來太瘦生」(『唐詩紀事』)に基づく。

◎詩集の題にもなっているように詩人としての独立宣言として冒頭に置かれたものであろう。

2 村家

柴門徑暗路纔通 柴門 徑暗くして 路 纔に通ず

茅屋間憑碧竹叢 茅屋 間に憑る 碧竹の叢

雨外纜車聲斷続 雨外 纜車 聲斷続

風中簷馬響丁東 風中 簷馬 響丁東

一泉甘水堪烹茗 一泉の甘水 茗を烹るに堪へ

五畝肥園任摘菘 五畝の肥園 菘を摘むに任す

不省人間煩冗事 人間煩冗の事を省せず

八句猶健白頭翁 八句 猶ほ健なり 白頭翁

温雅渾全亦柳埤本色。七八尤妙。得詩家大乘。凡一首律詩起承転合

四字盡之。雖有佳句而此法不活則首尾不熟。譬若四支不仁之人雖有

眉目之美不免為廢物。雖然拘者亦反失之。徒費意於照應而欠字句之

工夫。譬若無智之人手足雖健不過一皂隸。而得兼存為至難也。柳埤

於詩最用心於此際。讀者勿忽焉。此詩額聯總承一二之句無痕迹也。五六之轉不甚着力。所以伸合句十分之雋永也。

温雅渾全も亦た柳埤の本色。七八、尤も妙。詩家の大乘を得たり。凡そ一首、律詩の起承転合の四字、之に盡く。佳句有りとも雖ども、

此の法、活かさずんば則ち首尾熟せず。譬へば四支不仁の人、眉目の美有りと雖ども廢物たるを免れざるが若し。然りと雖ども拘する

者も亦た反て之を失す。徒に意を照應に費やして字句の工夫を欠く。譬へば無智の人、手足健なりとも雖ども一皂隸に過ぎざるが若し。而

ながら得、兼て存するは至難と為すなり。柳埤、詩に於て最も心を此の際に用ゐる。讀者、忽たること勿かれ。此の詩、額聯、一二の

句を總承し痕迹無きなり。五六の轉、甚だは力を着かず。合句、十分の雋永を伸ばす所以なり。

【訳文】柴の門に続く小徑は暗く、路はやつと通じている。茅の家

は静かに青々とした竹林に接している。雨の日の屋外では、荷車の音が断続して聞こえ、風の吹く中では、軒の風鈴がちりんんと響く。

一泉の甘い水では、茗茶を煮るのに十分で、五畝ほどのよく肥えた

庭では、白菜が摘むがままである。世間の煩雑な事がらを気にすることもなく、白頭の翁は、八十歳でなお達者なことだ。

温雅で渾全もまた詩佛(柳埜)の持ち前である。七八句は絶妙である。詩人として悟りを得ている。およそこの一首は、律詩の起承転合の四字を余すことなく表現したものだ。よい句があつても、この構成法を活かすことがなければ、首尾が調和しない。譬えて言えは手足がきかない人は眉目秀麗であつても、ものの役に立たないようなものだ。そうは言つても、この方法に拘わる者もまたかえつて失敗する。無駄に意を構成の照応に費やして字句の工夫を欠いてしまふ。譬えて言えは、無智な人が、手足が健であつても、ただのしもべに過ぎないようなものだ。両方自分のものとして、兼ねているのは至難の業なのである。詩佛は、詩において最も注意をここに用いている。読む者は、それをうつつかり見落としてはいけない。この詩は、額聯が一二句をまとめて承けてその痕迹を感じさせない。五六句の転で、あまり力を入れなかったのが、七八句で十分表現力を發揮できた所以である。

○八句猶健白頭翁「老翁八十猶強健」の句が『聯珠詩格』巻七、白雪湖「田家」にある。○大乘 詩佛に対する評語では仏教語が使われることが多い。○額聯 普通は律詩の三四句は額聯。額はあご顎(あごガク)から額(ガク)と用いたか。本書では一貫して「額聯」

と言っている(2、27、100の三箇所)。○無痕迹「斧鑿痕を留めない」詩文に技巧をこらしてなおかつその痕跡がないのがよい詩とされる。

3 江亭春霽

亭枕清江眺望奇 亭は清江に枕んで 眺望奇なり

来尋剩雨乍晴時 来尋す 剩雨 乍ち晴るる時

蘋風欲起岸維艇 蘋風 起んと欲して 岸 艇を維ぎ

竹霧初消村曝絲 竹霧 初めて消じて 村 絲を曝らす

買醉寧知流水感 酔を買て 寧ろ知んや 流水の感

惜春懶賦落花詩 春を惜て 賦するに懶し 落花の詩

何愁心事等間過 何ぞ愁ん 心事の等間に過ることを

只怨風光特地移 只だ怨む 風光の特地に移るを

三之句承一、四之句承二。以七結流水、以八結落花。血脈流通而其法自整。近世詩人或似無見於此。故諱諱及之云。

三の句、一を承け、四の句、二を承く。七を以て「流水」を結び、八を以て「落花」を結ぶ。血脈、流通して、其の法、自ら整ふ。近世の詩人、或は此を見ること無きが似し。故に諱諱として之に及ぶと云ふ。

【訳文】亭は清らかな江に臨んで、眺望は素晴らしい。長く降り続

いた雨がさつと晴れた時に、尋ねてやって来た。水草の上に風が起とうとする時に、岸に艇をつなぎ、竹にかかつていた霧がやつと消えた頃、村では釣糸を曝らしている。酒を買って飲めば、どうして水の流れに無常を感じたりしようか。春を惜しんでいると、花の落ちる詩を作るのさえ面倒だ。どうして愁おうか、自分の思いがなおざりに過ぎ去ってしまうことを。ただ怨むのは、季節の風光があつという間に移ってしまうことだ。

三句は、一句を承け、四句は、二句を承ける。七句で「流水」の語を結び、八句で「落花」を結ぶ。(表面に現れない)血脈のように、一句おきに流れて、その構成法は、自ら整のつている。最近の詩人には、或いはこうした方法を見ることがないようだ。そこで、くどくどこの説明に及んだというわけだ。

○亭枕清江 枕は、のぞむ。○流水 所謂、逝水の嘆。『論語』子罕第九「子在川上、曰『逝者如斯夫』」○特地 地は助字。

◎中野評は、句ごとの対応を指摘している。律詩は絶句ほど構成が明確ではないので、句ごとの分析が重要になる。

4 郊村

平郊 一路破村沙 平郊 一路 村沙を破る
穀葉重重接塙茶 穀葉 重重として 塙茶に接す

搗紙女依晴岸石 紙を搗く女は晴岸の石に依り
攜籠翁入晚山霞 籠を攜る翁は晩山の霞に入る
野花開處多無主 野花 開く處 多くは主無く
叢竹深中定有家 叢竹 深き中 定めて家有らん
此際將求逃世客 此の際 將に世を逃るる客を求めんとす
遥遥隔水聽琵琶 遥遥 水を隔てて琵琶を聴く

後聯用意。故能使七八平淡之句有滋味也。後聯、意を用ゐる。故に能く七八平淡の句をして滋味有らしむるなり。

【訳文】 広々とした郊外の村、一筋の路が、ひなびた土地を破るよ
うに通じ、穀類の葉は、何層にも重なつて、茶の土手に接するまで
続く。紙を搗いている女は、晴れた岸辺の石によりかかり、籠を携
える翁は、暮れかかった山の夕焼けの中に入っていく。野の花が咲
く所は、その多くは主も無い土地で、竹藪が深く茂つている中には、
定めて家が有ることだろう。そんなところで、まさに世を逃れる御
仁を探すとしよう。川を隔てて、はるかかなたの琵琶の音を聴いて
いる。

後聯(五六句)に工夫して余情のある句を用いた。それで、七八句
の平淡の句に滋味を出させているのである。

○後聯用意 五六句では、「主無し」「家有らん」と、竹を植えて隠れ住む風流人の存在を想像させ、七八句の意や行動につなげていることをさす。

◎平淡の詩は詩佛の理想の一つで、ここで中野評は平淡の句を生かすことを可能にする詩の構成について指摘した。

5 晚歸品川

烟霧高輪暮 烟霧 高輪の暮

前途更渺茫 前途 更に渺茫

潮來吞缺岸 潮來て 缺岸を呑み

月湧出危檣 月湧て 危檣を出す

蓬戸無人守 蓬戸 人の守る無く

梅窗有酒香 梅窗 酒の香しき有り

繩床拂塵罷 繩床 塵を拂ひ罷て

乞火向隣莊 火を乞て 隣莊に向ふ

清麗圓妥。前對佳甚。吞出二字大巧。斬新不易道。 清麗圓妥。前對、

佳甚し。「吞」「出」の二字、大巧、斬新、道ひ易からず。

【訳文】霧と霧の中、高輪への帰途、日も暮れてきた。道の先は、一段と果てがないように見える。潮が満ちてきて、えぐられたような岸を呑みこみ、月が湧いてきて、高い帆柱を現す。粗末な我が家は、

留守を守る人も無いが、梅の見える窓からは、酒のよい香りがただよう。繩の腰掛けの塵を払い終わって、火を乞いに、隣の家に向う。

清らかで麗わしく円熟して穏やかな詩である。前對が、特に非常に良い。「吞」と「出」の二文字が、非常に巧く斬新で、なかなか表現できるものではない。

○高輪 当時の詩佛の住まい。既醉亭。 ○月湧 高輪は、「江戸

名所図会』高輪海辺 七月二十六夜待ち」で知られる。 ○梅窗 詩

佛の別号、瘦梅にちなむ。 ○有酒香 既醉亭にちなむ。 ○繩床

繩を張って作った粗末な腰掛け。126詩にもあり、その表現では身を

横たえる長椅子か。

◎前聯の擬人化した表現をほめたか。

6 旅況

籃輿伊軋中 籃輿 伊軋の中

郷夢只纒通 郷夢 只だ纒に通ず

過嶺溪流北 嶺を過れば 溪 北に流れ

背山家面東 山に背て 家 東に面す

滿江漁艇雨 滿江 漁艇の雨

半野酒旗風 半野 酒旗の風

此處多奇跡 此の處 奇跡多し

誰為爛醉翁 誰か爛醉の翁と為る

【訳文】駕籠に乗り、掛け声の聞こえる中で、故郷を思う夢を、ただわずかに見ている。嶺を過ぎれば、谷川は、北側に流れ、山の反対側に、家が東に面して建っている。川いっぱいの漁船に雨が降りかかり、野原に半ばほどの酒屋の旗を風がはためかせている。この辺りには、珍しい景色も多い。誰が酔っぱらいの翁となって、それを見過ごそうか。

○籃輿呼軋 きしるような音。范成大「高景山夜帰」に「伊軋籃輿草露間」の句がある。 ○郷夢 故郷に関する夢。

◎寛政五年六月山本北山に従って行った秋田旅行時などの詩か。

7 墨牡丹

非碧還非白 碧に非ず 還た白に非ず

誰將淡墨描 誰か淡墨を將て描く

寶欄無月夜 寶欄 月無きの夜

錦幄未明朝 錦幄 未だ明けざるの朝

雨過枝難濕 雨過て 枝 湿ひ難く

風廻葉欲揺 風廻て 葉 揺れんと欲す

此花雖異色 此の花 色を異にすと雖ども

不可是花妖 是れ花妖なるべからず

題險而詩穩。 題、險にして、詩、穩かなり。

【訳文】（その色は）碧ではなく、また真つ白でもない。いったい誰が（このような絶妙な）淡い墨で描いたのだろうか。美しい欄干から見、月の無い夜のように、きらびやかな錦の帷の中の、まだ夜の明けない朝のようなモノトーンだ。雨が通り過ぎても、枝は潤いにくい、風が舞えば、葉はかすかに揺れるようだ。この花は、普通と色が異なるというものの、これが花妖であるわけではないのだ。

詩の題は、詠むのに難しい題だが、詩は、無理なく自然な表現だ。

○非碧還非白 このような対象の細かい属性を羅列して表現するのは詩佛が後年も用いた手法。「雲」「似霧似煙還似雨」など。 ○欲揺 画の牡丹なので揺れないと言るのが普通だが、紙に描かれているので、その紙が風に揺れるところから言った。

8 夏夜集田中子建宅

居高涼自有 居 高くして 涼 自ら有り

況此雨餘天 況んや此れ 雨餘の天をや

事率觸無政 事 率にして 觸に政無く

趣真琴沒絃 趣 真にして 琴に絃没し

風多半岸竹 風は多し 半岸の竹

月足一池蓮 月は足る 一池の蓮

禮用和為貴 禮は和を用て貴と為す

何妨醉且顛 何ぞ妨げん 酔て且つ顛することを

自古起句佳不可多得也。此首一二不恥往賢。第五句初得風慳半岸竹句。自謂曰、以一句言之慳字勝多字十倍、以一詩觀之不與起句相應也。與有好句寧有好詩卒捨而不顧焉。可以為詩家嘉話柄矣。第七句安頓法語尤穩。老杜富貴於我如浮雲者、不多讓也。

古より起句の佳なるもの多くは得べからざるなり。此の首、一二、往賢に恥ぢず。第五句、初め「風慳半岸竹」句を得たり。自ら謂ひて曰はく、「一句を以て、之を言ふに、慳字、多字に勝ること十倍、一詩を以て之を觀るに、起句と相應せざるなり。好句有らんよりは寧ろ好詩有らん。卒に捨てて顧みず」と。以て詩家の嘉話柄と為すべし。第七句、法語を安頓し尤も穩なり。老杜「富貴は我に於て浮雲の如し」なる者、多くは讓らざるなり。

【訳文】住まいは高台にあり、自ら涼しい。いわんや今、雨上がりの空のもとである。率直な宴なので、酒の飲み方は気ままで、趣は真率で、(陶淵明にならつて)琴には絃がない。岸辺の半ばにまで叢がる竹の音で、風の強いのがわかり、池いっぱい蓮を、月の光が十分に照らす。「礼は和をもつて貴しとする」というではないか、ど

うして、酔っぱらうことを遠慮しようか。

昔から起句(第一句)の優れたものは多くは見られない。この詩は、一二句が、優れた先人に恥じない出来ばえだ。第五句は、初め「風慳半岸竹」という句を得た。自ら言うには「一句だけを見れば、慳の字は、多の字に十倍も勝っているが、詩全体を見れば、起句とうまく対応していない。好句であるより、好詩であるべきだ。結局(慳の字を)捨てて顧みなかった」とのこと。これは詩人のうるわしい話題となった。第七句、教訓をうまく配置し実に自然である。杜甫が「富貴は我に於て浮雲の如し」の語をうまく引用したのに、多くは讓らない。

○田中子建 『臈蘭稿甲集』に「名は見年。夢蝶と号す。俗称、喜六。東都の人。」「幼公遺草」にも詩が見られる。○鵜無政 「觴政」酒宴の興を添えるための飲酒の規則。○琴没絃 陶淵明の無弦琴。○禮用和為貴 『論語』学而篇に「有子曰、礼之用和為貴」とある。○好句く好詩 既に何度も述べてきた佳句と佳詩の関係と同じ。○第七句安頓法語尤穩 「富貴於我如浮雲」は『論語』述而篇(子曰、飯疏食飲水、曲肱而枕之、樂亦在其中矣、不義而富且貴、於我如浮雲。)の語であるが、杜甫がそれをそのまま詩中(「丹青引贈曹將軍霸」)に効果的に引用している手法をさし、この詩中でやはり同じ「論語」の「禮用和為貴」を効果的に用いていると言っている。

「法語」というのは、手本となる正しい言葉。

◎ここまで詩体として律詩が続いている。『五山堂詩話』巻一に世評として「詩佛は七律に長じ、七絶に短なり」とあり、詩佛の得意の詩体であった。

9 尋花

柳密桃疎鶯亂啼 柳密に桃疎にして 鶯 亂れ啼く

晚霞輕抹水東西 晚霞 輕く抹す 水の東西

病軀初覺因花健 病軀 初て覺ゆ 花に因て健なることを

一日經過幾暖堤 一日 經過す 幾く暖堤

雅淡清麗轉結特妙。得作家正脈。末句第六字改置數四。沈吟絳句最
後得暖字。下得太好。苦心之功不摩滅也。

雅淡清麗、轉結、特に妙。作家の正脈を得たり。末句の第六字、改置すること數四。沈吟、句を経て最後に暖字を得たり。下し得てただ好し。苦心の功、摩滅せざるなり。

【訳文】柳はびっしりとして桃の花はまだ疎らなところに鶯が乱れ鳴き、夕焼けの紅が、軽く抹するように東西に拡がって川を照らす。病んだ体が、花のおかげでやっと健やかになったのを感じる。一日でどれほどの暖かい日の当たる堤を通り過ぎたことだろう。

雅淡清麗で、転句と結句が特に優れている。詩人の正統を継ぐ者と言える。結句の第六字めは、字を改めて配置してみるのが数度に及んだ。深く考えた結果、十日も経って最後に「暖」の字に決めたのである。字を置いてみると実によい。苦心の功は、摩滅することはないであろう。

○暖堤 例えば「長堤」などの語にすると歩いた距離を示すだけになる。天氣がよく気分がいいこと、そうした日の下でも病軀を忘れて歩き回ったことも示すので、「暖」の字が優れているのだろう。

○雅淡清麗 言い方は様々に変化させているが、要するに「平淡」と同じ。○轉結特妙 弱っていた体でも花に惹かれて思わぬ長距離を歩いてしまったと花を直接描写するのではなく体に良かったと間接的に表現したのをいうか。

◎推敲過程が窺がえる。また、詩中の風景は江戸近郊の桃の名所、埼玉県越谷市などを連想させる。

10 元旦

茅屋年新不異常 茅屋 年新にして常に異らざるも

春心只覺日纔長 春心 只だ覺ゆ 日の纔に長きことを

間人事業君休笑 間人の事業 君 笑ふことを休めよ

此箇吟身自此忙 此れ箇の吟身 此より忙し

【訳文】粗末な我が家は、新年になっても特に変わったこともないが、春らしい気持ちと言えばただ日がわずかに長くなったのを感じるくらいだ。詩人とは暇人の仕事だなどと言って、君よ、笑わないでほしい。この詩人の身は、この春先からが忙しいのだから。

○此箇吟身自此忙 春になれば詩材が多いことを言う。

◎詩人自身のことを「間人」「吟身」と表現している。中野評がないのは素直な詩だからであろうか。

11 睡起二首

枯腸欲湿故烹泉 枯腸 湿さんと欲して 故らこゝろに泉を烹る

因頓吟思枕臂眠 因頓する吟思 臂を枕に眠る

睡裡分明過驟雨 睡裡 分明に驟雨過ぐ

覺來茶鼎吐輕烟 覺め来れば 茶鼎 輕烟を吐く

枯腸欲湿者欲湿枯腸也。因頓吟思者吟思因頓也。古人句法近世莫講之。

故審之。

「枯腸欲湿」は、「欲湿枯腸」なり。「因頓吟思」は、「吟思因頓」なり。古人の句法、近世、之を講ずる莫し。故に之を審らかにす。

【訳文】詩想の枯れた腸を潤そうと思ひ、わざわざ泉の水を沸かし

てみた。詩を考えて疲れ果てたので、臂を枕にして眠ってしまった。寝ている夢の中ではつきりと俄雨が通り過ぎていったが、醒めてみれば、茶鼎が軽く湯気を吐いているのであった。

「枯腸欲湿」は、「欲湿枯腸」と同じで、「因頓吟思」は、「吟思因頓」のことである。古人の句法であり、最近、この句法を講ずる者がいないので、ここに書いておく。

○枯腸 ひからびたはらわた。文藻のとぼしいこと。○故烹泉 故 普通の水でなく泉でということ。○因頓 疲れて倒れること。

○枕臂眠 「曲肱而枕之」「論語」「述而」貧しいが楽しみがある(枕もない状態なので)。○睡裡分明過驟雨 夢の中で聞いた音が覚めてみれば現実の別の音であったという発想の型。○覺來茶鼎吐輕

烟 杜牧「題禪院」に「茶烟輕颺落花風」とある。

◎散文と違って詩では、平仄などの関係から語順を入れ替えることが許される。

12 その2

常思採葉入雲峰 常に思ふ 葉を採て雲峰に入らんことを

假寐亦追塵外蹤 假寐も亦た追ふ 塵外の蹤

一夢醒來何所記 一夢 醒め来れば 何の記する所ぞ

天台山上數株松 天台山上 數株の松

飄逸可愛。 飄逸、愛すべし。

【訳文】常に、葉を採りに雲の深い高山に入ることを思っている。うたたねで見る夢の中でも、俗世間を離れたところを訪ねている。一回、夢から覚めて何を憶えているかという、天台山に生えている数株の松の木なのであった。

飄逸で、愛すべき詩である。

○常思採葉入 葉草を採りに雲深い山に入るのは隠者の常。 ○雲峰 雲のかかっている高山。 ○假寐 昼着る衣をつけたまま眠る。うたたね。(詩経・小雅) ○塵外 俗世間を離れた場所。 ○天台 天台宗の聖地、浙江省天台県。好んで用いる仏教関係の語のひとつである。 ○飄逸可愛 感想のみの評である。

13 夏夜同北山先生山本公行山田伯方江間徳人遊道灌山

(夏夜、北山先生・山本公行・山田伯方・江間徳人と同じく道灌山に遊ぶ。)

逐涼行盡斷山西 涼を逐て行き盡す 断山の西
滿眼蕭然轉欲迷 滿眼 蕭然として轉た迷はんと欲す
林外鐘聲知有寺 林外の鐘聲 寺有ることを知り

岸邊草色恐無蹊 岸邊の草色 恐くは蹊無し
窺人老犬聞籬吠 人を窺ふ老犬 籬を聞て吠へ
驚月痴鴉匝樹啼 月に驚く痴鴉 樹を匝て啼く
乘興莫論歸路遠 興に乗じて 論ずること莫れ 歸路の遠きことを
隨身自有一枝藜 身に随ふ 自ら一枝の藜有り

【訳文】夏の夜、北山先生・山本公行・山田伯方・江間徳人と共に道灌山に出かけた。

涼を求めてきりたつた山の西の果てまで行ったところ、目に入るもの全てものさびしく、ますます迷いそうになってきた。林の向こうから聞こえる鐘の音で、寺の有るのがわかり、岸のあたりの草の様子から、恐く道がないのが想像できる。人の様子を窺う老犬は、垣根を隔てて吠え、月に驚く愚かな鴉は、樹をめぐって啼く。興に乗じれば、帰路の遠いのは問題ではない。身には自ら一本の藜の杖を携えているのが有るのだから。

○北山先生 山本北山。 ○山本公行 山本緑陰。山本北山の子。同じく漢学者。 ○山田伯方 「山田櫻字、名は直大、字は伯方」と『詩聖堂詩話』にある。 ○江間徳人 寿阿弥曇庵の前名。森鷗外の「寿阿弥の手紙」で知られる。 ○道灌山 日暮里から田端に続く台地。『江戸名所図会』に「道灌山……この地、葉草多く、採葉の輩つねに

ここに來れり。ことに秋の頃は松虫・鈴虫、露にふりいでて清音をあらはず」とあり、虫聴きで有名。○断山 きりたったようなけわしい山。

14 題画(画に題す。)

寫出江山千里景 寫し出す 江山千里の景

風情總向此中稠 風情 總て此の中に向て稠し

一群鷗鷺飛無影 一群の鷗鷺 飛んで影無し

萬頃波瀾疊不流 萬頃の波瀾 疊んで流れず

突兀雲巒常吐雨 突兀たる雲巒の常に雨を吐き

參差楓岸鎮留秋 參差たる楓岸 鎮なへに秋を留む

相看何識老将至 相看て何ぞ識らん 老の將に至らんとするを

恰是人間小十洲 恰かも是れ人間の小十洲

常鎮二字置得妙。不須題而知其為画図也。 「常・鎮」二字、置き

得て妙。題を須ゐらずして其の画図たるを知るなり。

【訳文】見事に描きだしたものだ、この山水が千里もつづく景色を。

その風情はすべてこの絵の中に豊かに表れている。一群の鷗や鷺は飛んでいるが、その影は無く、果てしない波は、連なり重なったまま流れない。高く聳え立つ雲のかかる峰は、常に雨をそそぎ、不揃いに楓が植わる岸辺には、永遠に秋を留めている。これを見ていれ

ばどうして老いが至ろうとするのを知ろうか。ここは人間世界にありながら、あたかも仙境の山中だ。

「常」と「鎮」の二字は、実にうまく配置した。題画という題が無くて、描かれた世界が画中であるのがよくわかる。

○向此中 「向」は「於」の平仄による置き換え字。 ○飛無影 「影

無し・流れず」も絵であることをしめしている。 ○突兀 高く聳えるさま。 ○相看何識老将至 仙界では時間の流れが俗界と異なる。 ○十洲 道教で大海中の神仙の居住する十名山。

◎評で題画詩の基準が記される。時間が止まっている表現で、現実の風景を表現した詩との区別を図った。

15 寄懷今川剛侯(今川剛侯に寄懷す。)

日月徂如下坂車 日月の徂くは坂を下る車の如し

前遊僕指總堪嗟 前遊 指を僕すれば總て嗟するに堪たり

舊窗綠雨新抽竹 舊窗の綠雨 新たに抽く竹

滿架紅風半爛花 滿架の紅風 半ば爛るる花

句至自然痴亦足 句は自然に至て 痴も亦た足く

酒因太醉量還加 酒は太醉に因て 量 還た加ふ

思君更想同歡事 君を思て更に同歡の事を想へば

夢遶西郊第一家 夢は遶る 西郊の第一家

【訳文】月日の過ぎるのは、坂を転がる車のようで、前回の行遊を指折り数えれば、すべて歎くべきことだ。古い窓の緑の雨かと思つたと新たに移した竹で、棚いっぱい紅い風かと思つたと半ば咲き老いた花だ。句は自然に出来るが、駄句もまた多く、酒は大いに酔つて、酒量もまた増えてしまう。君のことを思つて、更に共に楽しんだことを想つと、夢は、昔の秋の野一番の家をめぐることだ。

○今川剛侯 「臭蘭稿甲集」「名は毅、緑窓と号す。備後福山人」とある。37詩「寄菅伯美」の注として「伯美、同社友の今川剛侯の兄なり」とあり、菅伯美の弟であるのが知られる。菅伯美は、菅谷帰雲。詩佛にとつては兄の菅伯美より先に面識があつた。○緑雨く紅風 緑雨は「新緑のころに降る雨」、紅風は「紅葉したかえでのために赤く見える風」という意味があるが、こゝは具体物ととらずに解釈した。○夢遶西郊 都城外の西方の野。西方の野で秋を迎える祭を行うから転じて秋の野辺をいう。

16 歳盡

春信欲来誰得知 春信 来らんと欲して 誰か知ることを得ん
寒威唯比昨宵衰 寒威 唯だ昨宵に比すれば衰ふ
滴檐疎雨雪消處 檐に滴る疎雨 雪の消する處
貼樹微霜梅發時 樹に貼する微霜 梅の發く時
閏曆先祈三月霽 曆を闔して先づ祈る 三月の霽

檢函手選一年詩 函を檢して手から選ぶ 一年の詩
花晨預思索藜出 花晨 預じめ思ふ 藜を索て出んことを
新句應無人競奇 新句 應に人の奇を競ふ無かるべし
第四句牽強惜也。不為好聯。 第四句、牽強、惜しいかな、好聯為らず。

【訳文】春の便りが来ようとしているが、誰が知り得よう。ただ、寒さの勢いが、昨晚に比べれば衰えたのがわかるくらいだ。雪が解けて、まばらな雨のように軒に滴り落ちる頃で、梅が咲いて、微かな霜のように樹に貼り付いた時のこと。曆に目を通して、まず春三箇月の晴を祈り、箱をあらためて、自らこの一年の好詩を選ぶ。今から考えている、花咲く朝に藜の杖を索て出かけることを。新鮮な句ができて、他に奇を競う者もないはずだ。

第四句が無理なこじつけで、惜しいことに、良い聯にならなかつた。

○貼樹微霜 樹に微霜が貼して、それが白梅の比喩であるという句だが、評では牽強とされた。○祈三月霽 春になると詩材が増えるからいう。10詩「元旦」にも類想句がある。○檢函手選一年詩 祭詩のこと。賈島の故事。「以歳除之夜、取一年所作詩」

17 寄懷中野子興

羨君無事這心安 羨む 君の無事にして這の心の安きことを

短褐偏慙忽向寒 短褐 偏に慙つ 忽ち寒に向ふことを

新夢難將新句寄 新夢 新句を將て寄せ難く

舊遊唯把舊篇看 舊遊 唯だ舊篇を把て看るのみ

閨中歲月詩三昧 閨中の歲月 詩三昧

靜裏穠光雪一團 靜裏の穠光 雪一團 (菊有一團雪名)

別後頻思情話 別後 頻に情話の覆きことを思ひて

採毫徒寫獨頭蘭 毫を採て 徒に寫す 獨頭蘭

合句不拘事實而自有據焉。最可喜者也。 合句、事實に拘らずして自ら據る有り。最も喜ぶべき者なり。

【訳文】羨ましいことだ、君が特に事も無くその心を安んじているのが。私ときたら粗末な短かい衣が、実に恥ずかしい、すぐに寒い季節になろうというのに。新しく見た夢でも、新句を(君に)寄せることは難しく、旧遊を思い出しても、(新たな発想はなく)ただ旧篇を把つて見るだけだ。閑暇な歲月は、詩三昧に過ぎ、静かな中の秋の風光は、雪一団なる菊の花がある。「菊」「一団雪」と名づけるものがある」別後に、頻りに心のこもった話のうるわしかったことを思つて、筆を執つて、空しく花一輪を付ける蘭を描いている。

最後の二句は、実際の事柄に関わらないが、自ら思い当たるところもある。私にとつて最も喜ぶべき句である。

○中野子興 評者の中野素堂。 ○獨頭蘭 花一輪の蘭。蘭は君子に例えられる。中野素堂をイメージする。 ○合句 律詩の七八句めを指す。

18 春日幽居

四山隣里絶 四山 隣里絶へ

一路傍樵溪 一路 樵溪に傍ふ

門設無人賀 門 設れども人の賀する無く

簾垂有鳥啼 簾 垂れて鳥の啼く有り

柳眠風漸静 柳 眠て 風 漸く静に

梅綻月新低 梅 綻て 月 新に低し

也識足春味 也た識る 春味の足ることを

芽抽早韭畦 芽は抽く 早韭の畦

【訳文】四方は山に囲まれ、隣りの里とは途も絶えかかっているが、わずかに一本の路が、木樵の通る谷川に沿つて通じている。門は、設けてはいるけれども、新年の賀客も無く、簾を下ろしていても、鳥の啼りは聞こえてくる。だんだんと風が静かに吹いてきて、柳が葉を垂らして眠っているようで、梅の花が綻んでいるのを、出たば

かりの月が低く照らしている。また他からも、春の風情が満ちてきたことがわかる。例えば、春初に一番美味という韭はらの芽が出てきた畦のあたりに。

○一路傍樵溪 原本「溪」とあるが「蹊」の誤りか。韻目はどちらも八齊。「篋」は仄字で韻目違い。○門設無人賀 陶淵明の「結廬在人境、而無車馬喧」（飲酒其五）以来の表現。○芽抽早韭畦 南齊の文惠太子が周顥に、「山中で何が一番おいしいか」と尋ねたのに答えて「春初早韭、秋末晚菘」と答えたという（『南史』周顥伝）。

19 竹酔日

期時至今日 時を期して 今日に至り
扶醉向茅茨 醉を扶て 茅茨に向ふ
微雨将方落 微雨 将に方に落ちんとす
剛風且莫吹 剛風 且く吹くこと莫かれ
虚心何有夢 虚心 何ぞ夢有らん
熟睡總無知 熟睡 總て知ること無し
醒去君休恠 醒め去て 君 恠しむことを休めよ
為求閒地移 為めに閒地を求めて移すを

工緻切題。人有此伎備世無難題。
伎備有れば、世に難題無し。

工緻、題に切なり。人、此の

【訳文】（竹を移し植える）時期を待つて、今日に至り、（竹の）酔いを助けて、わがあばら屋に向かう。微かな雨が、まさにちようど落ちようとしているが、強い風は、しばらく吹かないでほしい。（忝のない竹は）虚心で、何で夢見ることがあるうか。熟睡して、何も知ることはないだろう。酔いから醒めても、君よ、怪しまないでくれ。君の為に静かな土地を求めて移植したのだから。

緻密な工夫がされていて、題にびつたりしている。この伎備があれば、世間に難題というものはないだろう。

○竹酔日 陰曆五月十三日。一説に八月五日。竹迷日とも。この日竹を植えるのに良いという。○君 竹を指す。竹の別名、此君から。
○虚心 竹の中空なのをいう。

20 送海君玉之備中二首（海君玉の備中に之くを送る二首）
馬蹄日日踏霜行 馬蹄 日日 霜を踏て行く
鳴雁啼猿總是情 鳴雁 啼猿 總て是れ情
求宿當求無水處 宿を求めば 當に水無き處を求むべし
潺湲為恐夢難成 潺湲 為に恐る 夢の成り難きことを

能以平易之事為新美之句。要在造語之工。能く平易の事を以て新美の句を為す。要は造語の工に在り。

【訳文】馬蹄を鳴らして、毎日、霜を踏んで旅する。鳴く雁も猿も、全てが旅情を深める材料だ。宿を求める時は、近くに川の無きところにしてほしい。さらさらとした川音で夢を成しがたいことを恐れるからだ。

うまく平易な事や語を使って、新美の句を作った。その工夫は、要するに造語の工夫にある。

○海君玉 海野蟻齋。君玉は字。備中庭瀬藩の江戸留守居役。江湖詩社の長老格。○馬蹄日踏霜行 温庭筠「商山早行」に「人跡板橋霜」の句がある。○鳴雁啼猿 両方とも旅情を誘う風物。

○求宿當求無水處 普通は川があつた方が景物として良いが、「逝川の歎」を意識するか。○平易之事為新美之句 清新派の詩法がうかがえる。○造語之工「無水處」など、ありふれた字を使って新しい表現を作つた部分。

21 ◇2

自此江山難寄辭 此より江山 辭を寄せ難し

慎侵霜雪莫違時 慎て霜雪を侵して時を違ふこと莫れ

一言唯為池生道 一言 唯だ池生が為に道へ

(池桐孫字無絃江湖社中詩人時在讚岐)

(池桐孫、字は無絃。江湖社中の詩人。時に讚岐に在り。)

都下詩風大半移 都下の詩風 大半移ると

其所自任可想。 其の自任する所、想ふべし。

【訳文】この江戸から山や川を越えて旅する君へ言葉を送るのは難しいが、霜雪を侵して旅するのに、どうか慎重にその安全な時を間違えることはないようにしてほしい。それから一言、菊池五山に言ってもらいたい、(菊池五山桐孫、字は無絃で、江湖社中の詩人。当時、讚岐にいた。)江戸の詩風のは大半は清新性靈派に移つてきたぞ、と。

その江戸詩壇を主導しようという自負が想像できる。

○慎侵霜雪莫違時 本来は「農繁期に逆らつて民を使うこと(国語)。

「使民以時」「論語」学面。ここは旅程において暗れたら進み、雪なら休むようにして無理しないように、の意味か。○池生 原注に

あるように、江湖詩社の盟友、菊池五山をさす。当時、江戸を離れていた。○都下詩風大半移 当時は、江戸中期に主流であつた古

文辞格調派の詩論に、天明三年刊行の山本北山『作詩志彀』などが

批判を加え、清新性靈派の詩風の流行が始まつた時期であつた。詩佛はじめ江湖詩社の詩人達は実作でそれをリードしていた。特に詩佛は格調派からの転向ではなく詩作の当初から清新派の詩風で作詩

していた。

22 紙鳶

片身高冲碧雲中 片身 高く冲る 碧雲の中
進退随絲西又東 進退 絲に随て 西又東す
童子不知春減却 童子は知らず 春の減却するを
落花江上謾呼風 落花 江上 謾に風を呼ぶ

【訳文】 わずか一個の小さな風が、青くすんだ雲の中まで高く昇つていき、その進退は、糸を引くままに、西に東に行ったり来たりする。風糸を引く子供は知らないのだ、春の季節がだんだんと終わろうとしているのを。風が吹けば花が落ちていくというのに、川のほとりで、何も考えずに「風を飛ばすための風よ吹け」と呼んでいる。

○冲 冲と同じ。冲は、のぼる（『史記』「一飛冲天」）。○碧雲 青くすんだ雲。「揚言碧雲裏 言を揚ぐ碧雲の裏」（李白・古風・七）
○春減却 「却」は、去（とりさる）。「一片花飛減却春 一片の花飛びて春を減却す」（杜甫・曲江・一）○謾 みだりに。そぞろ。漫に通じる。漫は、みだりに。考えもなく。○呼風 風を飛ばすのに好都合な風を求めること。

23 立春

解凍東風一夜来 凍を解く東風 一夜に来る
初知春自暗中回 初て知る 春の暗中より回ることを
風光未改人心改 風光 未だ改まらざるに 人心 改る
欲數庭前欲放梅 數へんと欲す 庭前 放たんと欲する梅

【訳文】 氷を解かしたように春風が、一晚にやって来て、やっと、春がいつのまにか帰って来たことに気づく。風景はまだ変わっていないのに、人の心持ちは入れ替わって、庭に出て、開こうする梅の蕾など数えようとしている。

○暗中 やみの中。ひそかに。人知れず。
◎律詩に比べて絶句は日常詠的作品が多い。

24 偶成

間追暖日向南廊 間に暖日を追て南廊に向ふ
廢却鴨爐兼鹿床 廢却す 鴨爐と鹿床と
為是梅花無數發 是れ梅花無數の發くが為に
浄窓半月不焚香 浄窓 半月 香を焚かず

是亦天民得意之詩。末句初置半月之字。中数改作一作半。後卒決之。此等處自古作家未嘗不沈吟苦心也。楊廷秀、有南齋前梅花詩兩樹相挨前後發老夫一月不燒香之句。不知者或以此為襲之。盖天民偶不記

而暗合者等位之相逼致同然。固無害也。况誠齋句以兩樹開落不均時之故言一月不燒香也。柳埜以一樹之梅乃言半月。所謂易地則皆然者乎。非善並存不妨也。可以見用心之巧各有得矣。

是も亦た天民得意の詩。末句、初、「半月」の字を置く。中、數しは改め「一」と作し「半」と作す。後、卒に之を決す。此等の處、古より作家の未だ嘗て沈吟苦心せざるなり。楊廷秀、「南齋前の梅花」の詩に、「兩樹、相接て前後に發き、老夫、一月、香を燒かず。」の句有り。知らざる者は或は此を以て之を襲ふと為さん。蓋し、天民偶ま記せずして、暗合する者なり。等位の相逼て、同然を致す。固より害無きなり。況んや誠齋の句、兩樹の開落、時を均しうせざるの故を以て、「一月香を燒かず」を言ふなり。柳埜、一樹の梅を以て乃ち「半月」と言ふ。所謂、「地を易ふれば則ち皆自然らん」者か。善だ並存妨げざるのみに非ざるなり。以て用心の巧、各の得る有るを見るべし。

【訳文】余暇に暖かい春の日射しを求めて南の廊下に行き、すっかり香炉と長椅子とを片付けてしまった。それは、梅の花が無数に開いている為で、この清らかな書齋ではもう半月も香を焚いていないのだ。

この詩もまた詩佛の得意の詩である。結句は、最初、「半月」の字

を置いていた。途中で、何回も改めて「一」としたり「半」としたりした。最後に、ついに「半月」と決めた。こうしたところは、昔から詩人が未だかつて考え込んだり苦心したりしなかつたところである。楊誠齋の、「南齋前の梅花」の詩に、「兩樹、相接て前後に發き、老夫、一月、香を燒かず。」の句がある。知らない者はあるいはこの句を使って踏襲したものとするかもしれない。しかし思うに、詩佛は誠齋の句を覚えていたわけではなく、偶然に一致したものであろう。同じような状態が迫って、同じような詩句が現れたのだ。勿論、問題ないものである。いわんや誠齋の句は、二本の樹の開くのと落ちるのが、時を同じくしないという理由で、「一月香を燒かず」と言ったのである。詩佛は、一本の梅なので「半月」と言ったのである。所謂、「形は変わっても心は同じ」ものといえようか。ただ、兩者の詩が並存して問題ないのみではない。このように用語に心を配る上手さは、それぞれが持っているのをよく見るべきだ。

○鴨爐 香炉。 ○鹿床 鹿牀。ここは香を樂しむ為の長椅子。鴨

爐と対語。 ○淨窓 明窓淨机。清らかな書齋(歐陽脩)。 ○楊廷

秀 楊誠齋の字。 ○等位之相 等しいくらい。同じような状況。

○易地則皆然者乎 「一見行為の形違つていても、その心は一つでみな同じ道を履んでいる。」(『孟子』離婁下)にもとづく。

◎楊誠齋の詩の受容を具体的に述べている。

◎31番詩の評に「既に此の手段有り。『偶成』の結末、豈に廷秀を模

さんや。」と続いている。この詩の評の中の「不知者」は模擬だとの批難があつたことを示している。

25 北山先生孝經樓

竹檐隣市井 竹檐 市井に隣り
梅牖對僧房 梅牖 僧房に對す
翠霧雖分界 翠霧 界を分つと雖ども
香風不隔牆 香風 牆を隔てず
吟詩心裡月 詩を吟ず 心裡の月
看劍眼中霜 劍を見る 眼中の霜
文事知兼武 文事 知んぬ 武を兼ねることを
兵書亦一床 兵書も亦た一床

三承一、四承二。翠霧分界言與世俗流不同焉。然徳之不可掩猶花香之不隔牆人人自知之也。五六能狀先生豪邁洒落必為有用之人讀之使人不覺凜然想像其人矣。若施諸世腐儒輩則為虛誕矣。必其腹中諳萬卷之書胸中貯百萬之兵如先生者而後為不失實也。

三、一を承け、四、二を承く。「翠霧、界を分つ」は、世の俗流と同じからざるを言ふ。然して徳の掩ふべからざるは、猶ほ花香の牆を隔てず、人人、自ら之を知るべきなり。五六、能く先生の豪邁洒落、必ず有用の人為るを状す。之を讀めば人をして覺えず凜然、其の人

を想像せしむ。若し、諸世の腐儒輩に施せば則ち虚誕為り。必ず其の腹中、萬卷の書を諳じ、胸中、百萬の兵を貯ふること先生の如き者にして後、實を失せずと為すなり。

【訳文】竹の見える軒は街に接しており、梅の見える窓は、僧房の向かいにある。竹林にかかる霧が、俗世間と世界を分けているが、梅の香る風は、垣根を隔てないように漂ってくる。詩を吟ずれば、心の中に月を見て、劍を見れば、眼の中に冷たい霜が映る。文事だけでなく実は武事をも兼ねていることがわかる。書の中で兵書もまた棚いっぱいなのだから。

三句目は一句目を受け、四句目は二句目を受けている。「翠霧、界を分つ」の語は、世間の俗人と同じではないことを、そしてその人徳の隠すことができないのは、花の香が垣根で隔てられないことから、人々は、自らこれを知ることができるだろう。五六句目は、うまく先生の豪放磊落な人柄と、世間に役に立つ人であるのを述べる。これを讀むと、人を思わず身を引き締めさせ、その人物を想像せしめるだろう。もし、世の中のつまらない儒者に用いられれば、それは虚飾になってしまう。その腹の中に万巻の書を諳んじ、胸の中には、百万の兵を貯えている、先生のような人物であつて初めて、実際と食い違わないと言えるだろう。

○竹櫓隣市井 市隱。「文選」王康琚「反招隱」の「大隱隱朝市」から非凡な隱者は山野に隠れず、かえつて市中の俗世間の中で超然と住んでいるとされる。大隱朝市。○吟詩心裡月 こころの中を詩にするのが性靈派の主張であるのとつながる。○看劍眼中霜 霜

は劍の鋭さをさす。○兵書亦一床 北山は「孝経」が表看板だが、兵書もまた一角を占めているの意。○豪邁洒落必為有用之人 北

山は学者・詩人というだけでなく「儒中の俠」と称され、寛政異学の禁に強く反対し、天明の大飢饉で救済運動をするなどの活動家でもあった。○萬卷之書 文人は、万卷の書を読み、千里の路を行くべきとされた。杜甫にも「讀書破萬卷」の句がある。○胸中貯百

萬之兵 「胸中有百萬之兵」は常套的な言い方。

26 春風

一陣非生春水耳 一陣 春水の生ずるのみに非ず

幾番應候入芳叢 幾番 候に應じて芳叢に入る

且欣且怨君休恹 且つ欣び且つ怨む 君 恹しむことを休めよ

花落花開是此風 花落ち花開く 是れ此の風

【訳文】 一陣の春風が吹けば、春の川の水が漲るだけではなく、幾番幾番と、氣候に応じて花咲く草むらに吹いて順番に花を咲かせる。喜んだり恨んだりしているが、どうか君よ、怪しまないでほしい。花が落ちるのも花が開くのも、まさにこの風の為なのだから。

○一陣 風や雨などがちよつとの間、吹いたり降ったりする。一陣の風。○幾番應候入 二十四番花信風が順番に吹くこと。○芳叢 花の咲いている美しい草むら。

27 山莊十首

我愛山莊好 我れ山莊の好きを愛す

這中堪意行 這の中 意行するに堪へたり

品梅分伯仲 梅を品して伯仲を分ち

折柳試枯榮 柳を折て枯榮を試む

睡思過溪盡 睡思 溪を過て盡き

詩情上嶺生 詩情 嶺に上て生ず

時看送書鶴 時に書を送る鶴を看れば

偶有道人名 偶ま道人の名有り

額聯、閑雅。伯仲字、新美可愛。若言分甲乙不足復觀耳。七八、無中生有。

額聯、閑雅。「伯仲」の字、新美愛すべし。若し「甲乙を分つ」と言はば、復た觀るに足らざるのみ。七八、無中に有を生ず。

【訳文】 私は山中の別莊を愛好している。この中は、ままな散歩に十分な景物がある。梅を品評しては、わずかな善悪を区別したり、

柳の枝を折ては、その木の勢いを試したりしている。涙を過れば眠気も尽きるし、嶺に上れば詩情も生ずるといふものだ。時に書を送ってきた鶴を見ると、偶然、この世捨て人の名があつた。

前聯は、閑雅である。「伯仲」の字が、新美で愛すべきだ。もし「甲乙を分つ」と言えば、もう観るに足りなくなる。七八句は、何も無るところに有を生じさせた。

○我愛山莊好 『方秋崖詩鈔』に「山居」一首の五律がある。二首ともこの連作と同じように「我愛山居好」で始まる。また『誠齋詩鈔』卷三「和羅巨濟山居十詠」五律十首連作がある。○山莊 山中の別荘。○意行 心のおもむくまま自由に歩く。○品梅分伯仲

梅を品評する詩は『聯珠詩格』「梅花」一樹清標萬古同、風流人物品題中」などがある。○睡思過溪盡 睡意。眠気。○時看送書鶴 「鶴書」朝廷からの招出状。鶴頭書ともいふ。『誠齋雜記』に「鶴頭書、古者用之以招隱士」とあり、隱者を招くことを指す。○道人 僧侶、道者、仙人、隱者などを指すが、ここは隱者で自分のことである。

○伯仲であれば、わずかな差で両方すぐれていることになるが、甲乙だと単純に良否をいうだけになるということの中野評が指摘している。

◎范成大の「四時田園雜興」の連作絶句が流行したように、「山莊」「山

居」の連作も多く作られた。木百年「静窓詩」「山邨六首」など。

28 ◇2

我愛山莊好 我れ山莊の好きを愛す

境幽心亦幽 境 幽なれば 心も亦た幽なり

煙嵐孤寺路 煙嵐 孤寺の路

梅柳一溪流 梅柳 一溪の流

無事添書課 事無くして 書課を添へ

因病減酒壽 病に因て 酒壽を減ず

不曾蹈城市 曾て城市を踏まず

無敢愧盟鷗 敢て盟鷗に愧づること無し

三四格尤高。詩流正派。幽字可以蔽八句矣。不字平聲柳埜嘗曰、不字兩聲。如杜少陵、長江詩、浩浩終不息、乃知東極臨、裴迪、夏日過青龍寺謁操禪師詩、有法知不染、無言誰敢酬、盧倫、送顧祕獻書後歸岳州詩、黃葉落不盡、蒼苔隨雨生、馬戴、新秋雨霽宿王處士東亭詩、得意兩不寐、微風生玉琴、僧貫休、言詩詩、盡日覓不得、有時還自來、僧處默、蛩詩、微雨灑不滅、輕風吹欲燃、徐道暉、貧居詩、既與世不合、當今人事疎、陸游、得趙若川書因寄詩、澤居路絕人不到、晨起忽傳雙鯉魚。皆於正律中平用不字。他不勝枚舉。是故正字通曰、雖入聲轉平其義則一也。考證明確。今人概無復知者。所謂興廢繼絕其功偉矣。

三四、格、尤も高し。詩流の正派なり。「幽」の字、以て八句を蔽ふべし。「不」字、平聲なり。柳埜、嘗て曰ふ、「不」字兩聲なり。

杜少陵「長江」詩、

浩浩終不息 浩浩終に息まず

乃知東極臨 乃ち知る 東に臨の極まるを

裴迪「夏日、青龍寺を過り、操禪師に謁す」詩、

有法知不染 法有り 知 染らず

無言誰敢酬 言無し 誰か敢て酬いん

盧倫「顧祕獻書を送て後、岳州に歸る」詩、

黃葉落不盡 黃葉 落ちて盡きず

蒼苔隨雨生 蒼苔 雨に隨て生ず

馬戴「新秋、雨霽て王處士の東亭に宿す」詩、

得意兩不寐 意を得て 兩ながら寐ねず

微風生玉琴 微風 玉琴に生ず

僧貫休「詩を言ふ」詩、

盡日覺不得 盡日 覺めども得ず

有時還自來 時有りて 還た自ら来る

僧處默「蚩」詩、

微雨灑不滅 微雨 灑げども滅せず

輕風吹欲燃 輕風 吹て燃えんと欲す

徐道暉「貧居」詩、

既與世不合 既に世と合はず

當今人事疎 今に當て 人事 疎なり

陸游「趙若川の書を得、因て寄す」詩、

澤居路絶人不到 澤居 路 絶して人到らず

晨起忽傳雙鯉魚 晨起 忽ち傳ふ 雙鯉魚

の如き、皆な正律中に於て「不」字を平用す。他、枚擧に勝へず。

是れ故、「正字通」曰はく、「入聲平に轉すと雖ども、其の義、則ち

一なり」。考證明確、今人、概ね復た知る者無し。謂ふ所の廢を興こ

し絶を繼ぐ、其の功、偉なり。

【訳文】私は山莊の好い景物が気に入っている。環境が幽かであれば、心もまた幽かというものだ。もやがかかり山氣漂う、孤寺へ向かう路や、梅や柳に囲まれた、一筋の谷川の流れ。する事も無いので、讀書の課を増やしたが、病もあるので、酒量は減らした。けつして街中には足を踏み入れず、全く鷗の仲間としても愧じることも無いほど。

三四句の詩格、最も高い。詩流の正統派である。「幽」の字が、八句全体にかかつて雰圍氣を決めている。「不」の字は、ここは平声である。詩佛はかつて、「不」の字は平仄兩韻であると言っていた。その例証として、

杜少陵「長江」

浩浩終不息 乃知東極臨

裴迪「夏日、青龍寺を過り、操禪師に謁す」

有法知不染 無言誰敢酬

盧倫「顧祕獻書を送て後、岳州に歸る」

黃葉落不盡 蒼苔隨雨生

馬戴「新秋、雨霽て王處士の東亭に宿す」

得意雨不寐 微風生玉琴

僧貫休「詩を言ふ」

盡日覓不得 有時還自來

僧處默「蛩」

微雨灑不滅 輕風吹欲燃

徐道暉「貧居」

既與世不合 當今人事疎

陸游「趙若川の書を得、因て寄す」

澤居路絶人不到 晨起忽傳雙鯉魚

のように、皆な厳格な律詩の中で、「不」字を平声に使っている。他にも枚挙に暇がない。このために、『正字通』では、「入声が平声に転じるといっても、その意味は一つである」と言っている。考証は明確だが、最近の人はだいたい、知る人もいない。「不」の字を平声に用いるのは、所謂、「廢れたものを復興し、絶えたものを継ぐ」行為であり、その功績は偉大である。

○煙嵐 けむつて見える嵐氣（山氣）。 ○書課 讀書の課業。陸游「夜長穉子添書課」。 ○酒籌 さかづきのかずとり。 ○盟鷗 ↓

1詩、参照。 ○柳垞嘗曰 詩佛には「佩文韻府尚韻便覽」（文化二年刊）の著作がある。 ○杜少陵・裴迪・盧倫・馬戴・僧貫休・僧處默・徐道暉・陸游 唐宋の有名詩人。 ○正字通 明末の漢字字典。 ○興廢繼絶 「中庸」の「繼絶世、拳廢国」や「論語」の「興滅国、繼絶世」などを指す。

◎「不」の平仄が問題になっている「不曾踏城市」の句であるが、平仄を通例通り○●で示すと「不○○●」となる。本来、二四不同のルールから言えば、「不○○●●」となるべきところで、「不」の平仄は問題とならない（二三不論）。しかし、ここは下三字を○●ではなく●●とした。これは扶平格といって許される例外であるが、こうすると二字めの○を孤平にしないためには「不」の字が平である必要が出てきて、その平仄が問題になるのである。そして「不」は、イナヤと訓む場合は平、アラズの場合は仄とされている。この場合の意はアラズなので、二字目の孤平が生じてしまう。そこで、アラズの意味でも平字として用いることができるのを、唐宋の詩人たちの例をあげて、考証しているのである。

29 ◇ 3

我愛山莊好 我れ山莊の好きを愛す

春風満座馨 春風 満座に馨し

蝶迷焚麝室 蝶は迷ふ 麝を焚く室

鳥觸護花鈴 鳥は觸る 花を護する鈴

稚子託書篆 稚子 篆を書することを託り

老僧求寫経 老僧 経を寫すことを求む

簪毫忽出見 毫を簪して 忽ち出で見る

恠石在前庭 恠石 前庭に在り

頗有富貴之相。 十首中下等之詩也。 頗る富貴の相有り。 十首中、

下等の詩なり。

【訳文】私は山莊の好き景物を愛している。春風が、座いっぱいにかんばしく吹き過ぎる。蝶は、麝香を焚く室に迷いこみ、鳥は、花を護っている鈴に觸れて音を出す。幼子は、篆書を書くことをあやしみ、老僧は、経を写すように求める。官吏のように筆をはさんで、ふと庭に出てみれば、ふしぎな形の石が、前庭に在るのだった。

やや富貴の姿がある。十首の連作中、下等の詩である。

○馨 「馨」香とは別字だが、意はほぼ同じ。かおりが遠くから聞こえる。 ○麝 「麝」香名。麝香。 ○簪毫 「簪毫」は、官吏が筆をはさむこと。下級官吏になることを言う。耳にかけるようなイメー

ジカ。 ○恠 「恠」は怪の異体字。 ○富貴之相 高級な香の麝香、

鈴を付けて花盗人を防ごうという俗気、篆書や写経に対する否定的

な態度、庭の怪石などに俗臭を感じて、富貴の相と言った。

◎下平声九青の韻目は比較的險韻である。

30 ◇ 4

我愛山莊好 我れ山莊の好きを愛す

門關無客來 門 關して 客の來る無し

烟霞新画譜 烟霞 新画譜

泉石舊詩材 泉石 舊詩材

添竹從鶯宿 竹を添て 鶯の宿るに従せ

披松任鶴猜 松を披て 鶴の猜ふに任す

更期風月夜 更に期す 風月の夜

幽獨酒三杯 幽獨 酒三杯

【訳文】私は、山莊の好い景物が大好きだ。門は閉ざして、客が來ることもない。かすみやもやは、新鮮な絵の手本だし、泉と石は、昔からの詩の材料だ。竹を植え添えて、鶯が宿るのにまかせ、松を切つて形がかわつたのに鶴がびつくりするのにまかせている。更に期待しているのは、清らかな風と月夜に、ひとり静かに酒三杯でも傾けることだ。

○烟霞 もやとかすみ。山水のすぐれたけしき。○画譜 絵の手本。
○泉石 自然の景色。山や川の泉と石。○任鶴猜 鶴は松に宿る
のだが、松を切つたためいつもと景色が変わり鶴が疑つた。○幽
獨 「幽獨」静かにひとり居る。

31 ◇5

我愛山莊好 我れ山莊の好きを愛す

春來未出莊 春來 未だ莊を出でず

松扶欲仆戸 松は仆れんと欲する戸を扶け

苔上半頽墻 苔は半ば頽るる墻に上る

修得焚香法 香を焚く法を修し得て

栽花種海棠 花を栽れば 海棠を種ゆ

海棠花發處 海棠花 發く處

簾外夕陽長 簾外 夕陽長し

全篇皆好。見不出莊亦足自娛也。五六風韻不可言。圓成不拘對偶可喜。
既有此手段。偶成結末豈模廷秀乎。

全篇、皆な好し。「莊を出でず」も亦た自ら娛しむに足るを見るなり。
五六、風韻、言ふべからず。圓成、對偶に拘らず、喜ぶべし。既に
此の手段有り。「偶成」の結末、豈に廷秀を模さんや。

【訳文】私は、山莊のよいところがひたすら気に入っている。春か
らまだ山莊を出ることがないくらいに。松は、もうくずれ倒れよう
としている戸を支え、苔は、半ばくずれている土墻に上つてきている。
香を焚く方法を修めたので、植える花は、(香のない)海棠を植えた。
海棠の花が開く時、簾の向こうに、いつまでも夕陽が照りつけている。

全篇、皆な素晴らしい。「莊を出でず」の句も自らその境涯を楽しん
で満足するのを見るようだ。五六句の風韻は言うまでもない。完全
にまとまった表現で、對偶にこだわらないのが、よかつた。これほ
どの手腕があるのだから、24詩の『偶成』の結末も、どうして楊誠
齋を模したりしようか。

○栽花種海棠 海棠と香の關係は、海棠が香なく香の邪魔をしない
ため。「花譜」に「海棠無香」とある。○圓成 評にも仏語が見ら
れる。「円成」エンセイ・エンジョウ。仏語。円満に成就する。完全
にできあがる。○偶成結末豈模廷秀 24番「偶成」詩参照。24番
詩の評のつづきとなっている。

○時には律詩の對句をくずしても、表現内容を優先させた方がい
いという中野評の主張が見える。

32 ◇6

我愛山莊好 我れ山莊の好きを愛す

山莊固可欣 山莊 固より欣ぶべし

小溪三寸雨 小溪 三寸の雨

老屋半間雲 老屋 半間の雲

因作林巒主 林巒の主と作るに因て

得稱猿鶴君 猿鶴の君と稱することを得たり

閒厨偶將乏 閒厨 偶ま將に乏しからんとす

隣叟送香芹 隣叟 香芹を送る

欣字不曠。第三句巧在小一字。可以壓倒昨夜榕溪三寸雨之句。

「欣」字、曠(むなし)からず。第三句の巧、「小」の一字に在り。以て「昨夜榕溪三寸雨」の句を壓倒す。

【訳文】私は、山莊の好い環境が気に入っている。山の中の別莊は、本当に素晴らしいところだ。小さな谷川には、三寸ほどの雨がそそぎ、古びた家は、半分は雲が浮かんでいる。山林の主となつたので、猿と鶴の君と称することができる。静かな厨房が、たまたま食材に乏しくなれば、隣の翁が、香りのよい芹を持ってきてくれる。

「欣」の字、が効果的である。第三句で巧みなのは、「小」の一字である。それで、范成大の「昨夜榕溪三寸雨」の句を圧倒している。

○山莊固可欣 底本は「固に」。○老屋半間雲 『訳註聯珠詩格』に「白雲棲半間」、「老僧半間雲半間」の句がある ○因作林巒主 林と山。○閒厨偶將乏 たまたま食物が足りないときは芹を持ってきてくれる。○香芹 かおりのよい芹。○欣字不曠 ようこぶ、の訓をもつ字はいくつかあるが、その中から「欣」を選んだのが効果的というのであろう。○第三句巧在小一字 范成大の「榕溪三寸雨」を「小溪三寸雨」と利用したのが巧みであるというのであろう。○昨夜榕溪三寸雨 范成大「送周直大教授婦永嘉」七律の第三句。

33 ◇7

我愛山莊好 我れ山莊の好きを愛す

守真兼養慵 真を守り兼て慵を養ふ

殘碁得月斂 殘碁 月を得て斂め

剩米任奴舂 剩米 奴に任せて舂かしむ

藤蔓漸侵徑 藤蔓 漸く徑を侵し

薜蘿不離松 薜蘿 松を離れず

何嫌地偏狹 何ぞ嫌はん 地の偏狹なるを

隣舍有醇醲 隣舍に醇醲有り

句句顧慵一字置。殘碁至夜、以微儲付奴、不為徑與松治藤蘿也。合

句言地狹所以酒家近而慵亦餘也。何嫌其偏狹乎。

句句、「慵」一字を顧みて置く。「殘碁」夜に至る、微儲を以て奴に付す、

径と松との為に藤蘿を治せざる、なり。合句に言ふ、地狭にして、酒家近くして慵も亦た賒なる所以なり、と。何ぞ其の偏狹を嫌はんや。

【訳文】私は、山莊のよい生活を気に入っている。自然であることとのんびりできることからだ。指し掛けの暮も、月の光が出てきたので納めることにし、余っている米は、召使に任せて舂かせる。藤の蔓はだんだんと小径にはびこってくるが、つたかづらは、松にからまって離れない。土地の狭苦しいのをどうして嫌おうか、隣の家には濃厚な酒もあるのだ。

一句一句、「慵(ものうし)」の一字を意識して作られている。夜に至って指し掛けにすること、微かな蓄えの米を召使いにつかせる、小径と松との為に藤やつたかづらを手入れしない、などである。最後の句では言っている、土地が狭いので、隣の酒屋が近く、「慵」でもまた掛け買ひする気になるのである、と。だから、どうしてその狭苦しいのを嫌おうか。

○守真 本真を守る。道家で自然の本性を全うすることをいう(『莊子』漁父)。○剩米 わずかに残った米。○薜蘿 まさきのかづらとつたかづら。隠者の服や隠者の棲居に喩える。○醇釀 ジュンジョウ。濃厚な酒。民の風俗の従順で謹直な喩え。○合句 漢詩の最後の句。一般的には絶句の結句をいう。○除 シャ。かけ

で買う。はるか。ゆるやか。おごる。おこり。◎評では、律詩の構成を問題にしている。七八句が絶句の転結のよくな構成になっている。

◎この連作では山莊を十の立場からその愛好を述べている。一首ごとのテーマを示すのが、第二句であり、ここは守真と養慵となつて

34 ◇ 8

我愛山莊好 我れ山莊の好きを愛す

終甘作臥龍 終に臥龍と作ることを甘んず

句成初定韻 句成て初て韻を定め

興到後牽筇 興到て後 筇を牽く

閒事便忙事 閒事 便ち忙事

新跡是舊跡 新跡 是れ舊跡

毫無聞達意 毫も聞達の意無し

豈復夢生松 豈に復た生松を夢んや

三四工密。情在言外。承甘一字道其自適也。臥龍則結以聞達二字生

松則應臥一字。用事不苟也。

三四、工密。情、言外に在り。「甘」一字を承け、其の自適を道ふなり。臥龍、則ち結ぶに、「聞達」二字を以てし、「生松」則ち「臥」一字

に應ず。事を用ゐるも苟しからざるなり。

【訳文】私は山莊のよい生活を愛している。最後まで世に出ずに臥龍となるのに甘んずるつもりだ。句ができて、やっと韻目を定める気ままさで、興が乗ったら、後に杖を持って散歩に出かける。閑暇があるということが、すなわち忙しい事で、新しい道だと思えば、それは既に古人の歩いた道だ。名を揚げようなどという気はさらさらな。どうしてまた(出世を暗示する)松を生ずる夢を見たりしうか。

三四句は、精密な句作りだ。こめた思ひは、表現されないところにある。詩全体は「甘」の一字を受けて展開し、その悠々自適な生活態度を表現している。「臥龍」の語を結ぶのに、「聞達」の二字を使い、「生松」は「臥」の一字に應じている。深く考えずに故事を用いたのではない。

○臥龍 ガリヨウ。英雄の未だ時を得ず潜んでいる喩え。諸葛亮の故事。○句成初定韻 詩会や応酬の次韻などで韻目を決めて作るような方法ではなく、あくまで自分の感興に応じて気ままに詩作することを言う。○舊跡 古人の残した事業。足跡。○毫無聞達意 「不求聞達」(諸葛亮)「前出師表」名声の世に聞こえることを求めない。○豈復夢生松 「夢松」呉の丁固が腹の上に松が生じる夢をみて、松の字は分解すれば、十八公であるから、十八年後に公と

なると予言し遂に其の言のようになった故事(呉史)。○三四工密。情在言外 三四句とも、気ままな態度を示している。○生松則應臥一字 夢みるのは臥して、であるから対応している。

◎故事の使い方。内容だけでなく、縁語的關係も重視している。

35 ◇9

我愛山莊好 我れ山莊の好きを愛す

幽心一味中 幽心 一味の中

嗜茶常貯雨 茶を嗜みて 常に雨を貯へ

持瑟夜聽風 瑟を持して 夜 風を聴く

花管地肥瘦 花は地の肥瘦に管するも

筍無年險豊 筍に年の險豊無し

誰知不累客 誰か知らん 不累の客

端的勝為公 端的 公と為るに勝るを

【訳文】私は山莊の好き心持ちを愛している。それは、ひたすら静かな心でいられるところだ。茶を樂しむために、常に雨水を貯えておき、瑟を持つては、夜に風の音を聴く。花の出来は、土地の良し悪しによつて変わるが、筍が芽を出すのは、年によつての不作豊作はない。誰か理解しようか、何にもとらわれることのない者のほうが、明らかに王侯貴族となるのに勝っているのを。

○幽心 静かな心。 ○一味中 「一味」ひたすら。仏語では、如来の教法。其の理趣、唯一無二なるをもつていう（法華経）。ここは茶や筍の味を導く。 ○不累 めんどくなかわりあいが無いこと。
○端的 明白に。まさしく。

36 ◇10

我愛山莊好 我れ山莊の好きを愛す

風光隨地繁 風光 隨地に繁し

尋花出別路 花を尋て 別路に出づ

聽鳥入空園 鳥を聽て 空園に入る

斜日孤峰寺 斜日 孤峰の寺

微風獨樹村 微風 獨樹の村

茲邊着柳垞 茲の邊 柳垞を着て

長使役吟魂 長く吟魂を役せしむ

前對佳絕。於別字上空字上用工。 前對、佳絕。「別」字の上、「空」字の上に於て工を用ふる。

【訳文】私は、山莊の好き風光が気に入っている。その風光は、至るところに豊かにある。花を尋れば、思ったのと別の路に出たり、鳥の声に聴きほれて、人氣のない庭に入ってしまった。夕日のかかる孤峰には寺が見え、微かな風が、一本の樹のある村を吹き抜ける。

この辺りに、この詩佛をやつて来させて、長いこと詩情を働かせる。前對が非常に優れている。「別」と「空」の字に工夫が見られる。

○隨地 地に隨う。何処でも、到るところ。 ○着 著の俗字。つく。やつて来て。

◎前聯も後聯も隨地の地を四種に分けて述べる。

◎七八句は十首連作をまとめている。

37 寄菅伯美（菅伯美に寄す）

〔伯美同社友今川剛侯之兄也予未見其人因剛侯數見其詩〕

（伯美、同社友今川剛侯の兄なり。予、未だ其の人を見ず。剛侯に因て、數ば其の詩を見る。）

從來道在靜中成 從來 道は靜中に在て成る

殆惟屏居似不平 殆んど惟しむ 屏居の不平に似たるを

琴遣閒時猶帶恨 琴は閒を遣る時 猶ほ恨を帶び

句添工處只關情 句は工を添る處 只だ情に關る

不知早晚敲柴戶 知らず 早晚 柴戶を敲ひて

相共團樂醉竹罌 相共に團樂として竹罌に醉はんことを

近與剛侯吾往復 近ごろ剛侯と吾れと往復す

每常得把爾詩評 每常 爾が詩を把て評するを得たり

【訳文】 菅伯美は、同じ吟社の友である今川剛侯の兄である。私はまだその人と会ったことはない。ただ、剛侯によって、何回もその詩は見ている。

もともと道は静かな中で極めるものだといふのに、隠居が不平であるといふのをほとんど怪しんでいる。暇をつぶす時に爪弾く琴は、まだ恨みの音を帯びて、工夫を費やす時の詩句は、ひたすら気持ちがあふれる。遅かれ早かれ柴の戸を訪ねて、輪になって共に竹筒の酒に酔いたいものだ。近ごろ剛侯と私はよく行き来しているので、常々、貴方の詩を把って批評させてもらっている。

龍字照雲字。何等活動。 「龍」字。「雲」字を照らす。何等の活動。

【訳文】 文壇で何の成果もないなど言うことはない。かつて筆戦を取めて、千もの軍を護ったではないか。毛龍（筆）が伏しているこの函を、君がまさに開けば、山陰の幾片かの雲に龍が乗って天に昇るように、見事な筆跡が生まれるのだ。

「龍」の字と「雲」の字が照らしあつて、すばらしく生き生きと動いている。

○菅伯美 『詩聖堂詩話』17話。菅原帰雲。高崎藩士、詩人。寛政二年に藩主の勘気を蒙り、武州野火止に流された。一七五七〜一八二三。 ○今川剛侯 15、37注参照。 ○静中 しずかなうち。 ○屏居 屏居は隠居。 ○不平 野火止の謫居をいうか。 ○竹嬰 竹の吸いづつ（水筒）。嬰は、かめ。

○井伯直 中井董堂。書家、漢詩人、狂歌作者。一七五八〜一八二一。『詩聖堂詩話』26話に紹介記事。 ○文場 文壇。 ○無盛勲 立派に成し遂げたいさをし。 ○筆戦 文筆上のあらそい。文章で議論を戦わすこと。 ○毛龍 筆の異称。 ○發「發」筆函を開く。 ○雲の字が龍と筆跡の両方に響き合う縁語が効果的だという。

38 題井伯直筆函（井伯直の筆函に題す。）

莫道文場無盛勲 道ふこと莫れ 文場 盛勲無しと
曾收筆戰護千軍 曾て筆戰を取て 千軍を護る
毛龍伏處君方發 毛龍 伏する處 君 方に發かは
引起山陰幾朶雲 引き起さん 山陰 幾朶の雲

39 寄中野子興（中野子興に寄す。）

想君身在水雲隈 想ふ 君が身は水雲の隈に在ることを
一片閒心無點埃 一片の閒心 點埃無し
欲識故人風骨瘦 故人の風骨の瘦るを識らんと欲して

窓前折得一枝梅 窓前 折得たり 一枝の梅
贈此詩以羅紋箋印梅花枝者寫之。亦一韻事也。 此の詩を贈るに、
羅紋箋の梅花枝を印する者を以て、之を寫す。亦た一韻事なり。

【訳文】水雲の遙か向こうの君のことを想っている。そして、君の
ひとつの静かな心には、一点の埃も無いことも。貴方の風采の瘦せ
ているのを思い出そうとして、窓の前で、一枝の梅を折ってみた。

この詩を贈るのに、羅紋箋に梅花枝を印刷した紙に、これを写した。
これもまた一つの風流事であった。

○中野子興 評者の中野素堂。 ○水雲隈 この時、素堂は伊勢に
帰っていたか。「水雲隈」とは伊勢を指すのかもしれない。 ○水雲
水と雲。水上の雲。 ○一片閒心 ゆったりとひまな心。王昌齡「芙
蓉樓送辛漸」に「一片冰心在玉壺」の句がある。 ○風骨 からだ
の様子。風采。高尚な品格。 ○羅紋箋 「羅紋箋」最上等の薄い白紙。
◎評者の中野素堂自身に贈られた詩で、評も個人的なエピソードの
紹介となっている。

40 題寶晋齋硯（寶晋齋硯に題す。）

一枚奇硯米家物 一枚の奇硯 米家の物
脈理縮々潤澤多 脈理 縮々として 潤澤多し

燈下為君閒拜却 燈下 君が為を 閒に拜却すれば
寒星揺動半泓波 寒星 揺動す 半泓の波

【訳文】一枚の素晴らしい硯、米芾の家に伝わった物だ。脈々とし
て絶えずに、この硯は豊かに書を潤おし続けてきた。灯の下で、君
のあり方を、静かに拝していると、冬の冴え冴えとした星が、ゆら
ゆらと硯池の中の波に揺れている。

○寶晋齋硯 「寶晋齋」宋の米芾の建てた書齋名。晋人の法帖が刻し
てある。 ○米家 米芾と米友仁（元暉）の親子などを指す。 ○
脈理 すじ道。つづきぐあい。 ○縮々 長く絶えないさま。 ○
潤澤 恵む。うるおす。 ○燈下為君 君の性質。底本の送り仮名
に「君が為に」とあるが、「為人」の「人」を「君」に換えたもの
であろう。 ○拜却 「却」は「助辞ナリ」（詩家推敲）とある。
○寒星 さえざえとした冬の星。 ○半泓波 「泓」硯の水たまり。
硯泓。

41 過友人村居（友人の村居を過ぐ。）

行盡彎溪別有天 彎溪を行き盡せば別に天有り
樵風漁靄夕陽前 樵風 漁靄 夕陽の前
負薪女帶紅雲去 薪を負ふ女は紅雲を帯びて去り
投網翁分翠浪旋 網を投ぐる翁は翠浪を分て旋る

葉落鹿来連野径 葉落て 鹿は来る 野に連る径

潮生魚上傍江田 潮生じて 魚は上る 江に傍ふ田

對君終日耽碁局 君に對して 終日 碁局に耽る

豈識人間是一年 豈に識んや 人間 是れ一年なるを

【訳文】 曲がりくねった谷川を行く所まで行くと別天地があった。

風に吹かれる木樵や霧にかすむ漁師が、夕陽の中に見える。薪を背負う女は、桃の紅の雲を帯びて去っていき、網を投じている翁は、

翠の川浪を分けてまわっている。葉は落ると鹿が来る野に連なる径があり、潮が生じると魚が上ってくる江に沿っている水田もある。

君と向かい合つて、終日、碁の対局に耽っていると、どうして、人間世界ではもう一年も経っていると気づくのか。

○別有天 李白「山中問答」に「別有天地」とある。 ○樵風 木樵に吹く風。 ○漁霧 漁師にかかるもや。 ○紅雲 きれないの雲。

桃源郷の桃のイメージ。 ○翠浪 みどり色のなみ。 ○葉落鹿来

連野径 『古今集』秋上の猿丸大夫「奥山にもみじ踏み分け 鳴く鹿の声きくときぞ秋は悲しき」と通じる。 ○終日耽碁局 爛柯の故事。晋の王質は仙人の碁を打つてのを見て、斧おのの柄が腐るまで時のたつのを知らなかったという。

◎全体を仙界のイメージでまとめている。

42 寄松井延年 (松井延年に寄す。)

久恠短筇幾絶跡 久しく恠しむ 短筇の幾んど跡を絶つことを

近番閉戸避囂塵 近ごろ聞く 戸を閉て囂塵を避くと

一檐紅葉午時月 一檐の紅葉 午時の月

満地黄花九月春 満地の黄花 九月の春

品水先分茶甲乙 水を品して先づ分く 茶の甲乙

註経多諳藥君臣 経を註して多く諳んず 藥の君臣

精神練得誰能識 精神 練し得て 誰か能く識る

簾外人間鳥雀馴 簾外 人間にして鳥雀馴る

七律中之下者。務避踏襲之所致也。要之性靈之詩以格卑不容棄也。

七律中の下の者なり。務めて踏襲を避くるの致す所なり。之を要するに、性靈の詩、格の卑しきを以て棄つるを容れざるなり。

【訳文】 久しくいぶかっていた、短い杖を供に歩くあなたがほとんど跡を絶ってしまったのを。近ごろ聞くところでは、戸を閉て俗世間の塵を避けて読書にふけておられるとか。軒先にかかる紅葉は、昼時に月を見るようで、土地いっばいの菊の花は、九月に春が来たようだ。水を品評して、まず茶の甲乙を明らかにして、経書に注を施しては、多くの葉の良し悪しを諳んじてしまう。このように精神を磨きぬいても、いったい誰が知ることがあろうか。人ものんびり

しているのがわかるので、簾の外ではすっかり鳥雀が馴れているだろう。

七言律詩の中で、出来は下のものである。かつてある表現の踏襲をつとめて避けた結果である。要するにこれは、性霊の詩は、踏襲があるからと言って、つまり詩格が低いからと言って棄てる必要はないということだ。

○松井延年 『卜居集下』の校訂者。あるいは出資者か。『吳蘭稿甲集』に「名は壽、碧海と号す。東都の人」とある。○短筇 みじかい杖。

○近聳閉戸 「聳」の異体字は次の「閉」と門がまえが重なるのを避けたか。○閉戸 「閉戸先生」家に閉じこもって読書にふける人。

漢の孫敬をいう。○午時月 「午時月」は昼の月とも考えられるが、「九月春」と対なので比喻であって実際にはないものとした。○分

茶々語藥 茶や薬など、松井延年の職業などに関わるか。○簾外人間鳥雀馴 邪心のないことを示す。盟鷗の故事と同じ。○七律

中之下者 午時月、九月春、茶甲乙、薬君臣などの語が新鮮だがこなれていない表現になっていることを指す。

43 送小野崎尚甫之大坂（小野崎尚甫の大坂に之くを送る。）

懸崖破棧從鞍馬 懸崖破棧 鞍馬に從せ
行過長亭與短亭 行き過ぐ 長亭と短亭と

松葉起濤風脚翠 松葉 濤を起して 風脚翠に
稻花吐雪雨痕馨 稻花 雪を吐て 雨痕馨し

孤村燈滅知關戸 孤村 燈滅して 戸を關するを知り

幽館人遲未掩扇 幽館 人遅くして 未だ扇を掩はず

臨險忠心能叱去 險に臨んで 忠心 能く叱し去るも

夜猿啼處豈堪聽 夜猿 啼く處 豈に聴くに堪んや

第一句喚第七句事實。近世詩用事動輒突出。故屢評之。

第一句、第七句の事實を喚ぶ。近世の詩、事を用ゐるに動もすれば輒ち突出す。故に屢ば之を評にす。

【訳文】切り立った崖も壊れかかった棧橋も、鞍を置いた馬まかせに、街道の宿駅、距離の長いや短かいのを行き過ぎて行く。松の葉は風に吹かれて、波の音を起し、緑色の水紋のようで、稲の花は、白い雪を吐くようで、雨の痕からよい香を発している。ひとつだけある村は、灯が消えて、戸じまりをしたのがわかるが、静かな館だけは、人も遅くまで起きているのか、まだ扉を閉めない。旅の難所に臨んで、心の中で、自分を叱咤しつつ行くのだが、夜、猿が鳴いているところでは、どうして（その悲しげな声を）聴くに堪えようか。

第一句の故事が、第七句で述べる実際の事実を喚起させる。最近の

詩は、故事を用いるのに、どうかするとすぐに表現がそこだけ突出してしまふ。したがつて、何回もこの話題を細かく言うのである。

九十秋光不斷披 九十の秋光 披くことを断たず
纖巧詠物之體。 纖巧、詠物の體なり。

○小野崎尚甫 秋田藩士。「公用でたびたび大阪に赴いた」『国書人名辞典』による。『詩聖堂詩話』38話、『江戸詩歌論』p.618参照 ○

懸崖破棧從鞍馬 范成大に「懸崖破棧不可玩」の句がある。「破棧」

木曾の棧で有名な中山道を示すか。 ○長亭與短亭 宿駅。十里ごとが長亭、五里ごとが短亭。菅茶山に「長亭楊柳短亭花」の句がある。

○松葉起濤 松風の音「松濤」を波の音にたとえていう語。「風脚」

風によって起こる水の波紋。 ○稻花吐雪雨痕聲 范成大「新涼夜坐」に「江頭一尺稻花雨」の句がある。 ○臨險忠心能叱去「忠心」

心中の中。まごころ。「忠心能叱去」自分を上げます意。 ○夜猿啼處 猿の鳴き声は哀愁を帯びるとされる。

44 牽牛花

密葉長條壓竹籬

密葉長條 竹籬を壓す

一花正面一花欵

一花は正面し 一花は欵つ

紺珠將碎日升後

紺珠 將に碎んとす 日の升る後

細綿纔漸露滴時

細綿 纔に漸う 露の滴る時

至午微香迷蝶夢

午に至て 微香 蝶夢を迷はし

當昏新蕾突蛛絲

昏に當て 新蕾 蛛絲を突く

莫言凋落須臾事

言ふこと莫れ 凋落 須臾の事と

【訳文】密生した葉と長く伸びた蔓が、竹の籬を覆っている。一つの花は正面に向いて、また別の花は斜めを向いている。日が上った後に、紺色の珠のような蕾が、碎けて咲こうとし、露が滴る時に、あさぎ色の綿のような花が、はじめて洗われる。午に至れば、微かな香りが蝶の夢を迷わし、夕暮れになれば、新しい蕾が蜘蛛の巣を突き破る。言わないでほしい、花の凋むのがあつというまの事だなど。九十日間の秋の風光として、不断に開き続けるのだから。

繊細な技巧を尽くした、詠物詩の形式である。

○牽牛花 朝顔。 ○紺珠 ここでは朝顔の蕾を指す。 ○細綿 朝顔の蔓か。細はあさぎ、あさぎいろ。 ○漸 あらう。 ○詠物 詠物詩。

◎変化朝顔の栽培は、宝暦・明和ころから徐々に開始され寛政ころから人気を博した。また、詠物詩は安永・天明頃から長く流行した。

45 寶至 交辱舊盟不敢捐 交 舊盟を辱して 敢て捐てず

杖臨窮巷小春天 杖 窮巷に臨む 小春の天

杖臨窮巷小春天 杖 窮巷に臨む 小春の天

五株枯柳枝翻勁

五株の枯柳 枝 翻て勁く

數點狂花香暗傳

數點の狂花 香 暗に傳ふ

秋後豐饒隣有酒

秋後 豐饒にして 隣に酒有るも

夜來風雨市無鮮

夜來の風雨 市に鮮無し

婆心一片君何笑

婆心 一片 君 何ぞ笑はん

殘菊侵霜摘檻前

殘菊 霜を侵して 檻前に摘む

【訳文】 ありがたいことに、古い仲間なじみを、けつして見捨てず、十月の秋空のもと、杖をめぐらして、このむさくるしい裏町に來ていただいた。五本の枯れかかった柳の枝はかえて強く、いくつかの季節外れの菊の花の香は、ほのかに漂う。秋の収穫は豊かで、隣家に酒は有るが、夜中來の風雨で、市に鮮魚は入ってこない。一片の老婆心を君よ、どうして笑っているのか、客人の為に咲き残った菊の花を、霜も気にせず欄干の前で摘んでいるのを。

○小春天 陰曆十月。

○五株枯柳枝翻勁

俳諧的発想。「むつとして

もどれば庭に柳かな〔蓼太句集〕」。○狂花 咲いて実らない花。むだばな。徒花。ここは陶淵明のイメージから言つて、九月を過ぎて十月になつても咲いている八句めの「殘菊」をさす。○婆心 老婆心。親切氣。

○窮巷、五株枯柳、隣有酒、殘菊、など陶淵明のイメージで統一している。

46 家居

杖履常慵訪野蹊

杖履 常に野蹊を訪ふに慵く

柴門深鎖夕陽西

柴門 深く鎖して 夕陽 西す

一場春夢驚鶯語

一場の春夢 鶯語に驚き

滿架詩書汚燕泥

滿架の詩書 燕泥に汚る

苔厚初看花影薄

苔 厚くして 初て看る 花影の薄きを

柳高漸覺竹檐低

柳 高くして 漸く覺ゆ 竹檐の低きを

晚來時引山僧得

晚來 時に山僧を引き得て

自向幽畦摘瘦藜

自ら幽畦に向て 瘦藜を摘む

三四凡庸後聯大勝二句四字眼。三四、凡庸。後聯大に勝る。二句四字が眼なり。

【訳文】 野の小道を訪ねるのも面倒で、杖や履は常に置きっぱなし、柴の粗末な門は、奥深いところで鎖したまま、夕陽が西に入る。はかない春の夜の夢は、鶯の囀りで覚まされて、棚いっぱい詩の書は、いつのまにか燕の持つてくる泥で汚れている。苔が厚くなって、やつとわずかに薄く映る花の影を見て、柳の木が高くなって、だんだんと竹垣の低いのが感じられる。晚になると、時には山寺の僧を誘つて、自ら静かな畦道で、あまり育ちのよくない藜を摘む。

三四句は、凡庸である。後聯が大いに勝っている。二句目の、四字

目「鎖」が詩全体のイメージを決める詩眼の字である。

○杖履 杖とくつ。 ○柴門深鎖 「鎖」詩眼。 ○一場春夢 その

の場だけで跡形もない春の夜の夢。人の世のはかない喩え。 ○満架 たないっぱい。 ○花影 花のかけ。 ○花影薄 厚くはびこつ

た苔に薄く花の影が映るというのであろう。 ○山僧 山寺の僧。 ○藜 草の名。 若葉は食用だが、粗末な食べ物とされる。

47 送樋口子成從酒侯之津輕

(樋口子成の酒侯に從て津輕に之くを送る)

藍輿遙向萬重岑 藍輿 遙に向ふ 萬重の岑

處々山川啼恠禽 處々の山川 恠禽啼く

黒水橋餘朝露滑 黒水橋は朝露を餘して滑らかに

白河關鎖暮雲深 白河關は暮雲に鎖して深し

滿天瘴氣星光薄 滿天の瘴氣 星光薄く

絶海潮烟月色陰 絶海の潮烟 月色陰る

退食知君得閑日 退食 知んぬ君が閑を得る日

遼溪分草採芳葑 遼溪 草を分ち芳葑を採んことを

作手百出不可無此體。 若累篇則吾不知也。 作手百出、此の體無

かるべからず。 若し篇を累れば則ち吾れ知らざるなり。

【訳文】樋口子成が父上に従つて津輕に行くのを送る。

駕籠は、遙か万重にも重なる峰々に向つて行く。所々の山や川では、見知らぬ小鳥が鳴いているだろう。黒川の橋は朝露がまだ残つて、

滑らかで、白河の関は暮雲に深く鎖されている。空いっぱいには悪気が深い、星の光も薄く、遙か遠くの海の潮のもやで、月光も陰つて

いる。いつの日になるのだろうか、官職を退き君が閑暇を得る日、奥深い谷川で、草を区別し、中から朝鮮人參を採ることができるのは、

詩の作り手は大勢いるので、このような詩は誰でも作る。もしこの調子で詩篇を重ねるのであれば私の興味の外である。

○樋口子成 未詳。「臭蘭稿甲集」に岡村士幹の同題の詩がある。

○酒侯 われ。汝の父。父が子に対する自称。 ○黒水橋 白河市

下黒川という地名や黒川という川がある。 ○白河關 古代の関で

遺称地は福島県白河市。 ○瘴氣 熱病をおこす山川の悪気。 ○

絶海 遠く陸をはなれた海。 遠海。 ○退食 朝廷より家に帰つて

食事する。官吏が官署から家に帰ること。 ○遼溪 奥深くて物静

かな谷がわ。 ○葑 シン。ちようせんになんじん。「…今字作參」『本

草綱目』 ○作手 作り手。 ○此體 格調派的な送別詩のこと。

◎『臭蘭稿甲集』にも実際に同題の詩があるように、送別の挨拶詩であるのを中野評は批判している。

48 石上

石上揮觴向晚汀 石上 觴を揮て 晚汀に向ふ

灘聲轉處氣冷々 灘聲 轉ずる處 氣冷々

鷗邊日落波逾暗 鷗邊 日落て 波 逾いよ暗く

蘋末風回水亦聲 蘋末 風回て 水も亦た聲し

拂帽柳條千段緑 帽を拂ふ柳條 千段の緑

侵衣苔色一般青 衣を侵す苔色 一般に青し

元知幽味醉中在 元と知る 幽味の醉中に在ることを

坐久唯愁酒早醒 坐久して 唯だ愁ふ 酒の早く醒めんことを

用事有數法。暗用而不恃其事者最良而最難。猶諫有諷。七八用李德裕醒酒石事雖去其事而句意自全。是為得矣。

事を用ゐるに數法有り。暗用して其の事を持たざる者、最も良にして最も難し。猶ほ諫の諷有るがごとし。七八、李德裕の醒酒石の事を用ゐる。其の事を去ると雖ども、句意、自ら全し。是れ得たりと為す。

【訳文】日暮れ時、岩のほとりで杯を傾けて、水際に向かうと流れの音が変わるあたり、気分も清らかにしてくれる。鷗の遊ぶところは、日が落ちて波も一段と暗くなり、浮草の尖端に風が回って、水までも香しい。帽子を払ふ柳の枝は、千段の絹のような緑で、衣を侵す苔の色は、一様に青い。もともとわかっているのだ、静かな味わいの

境地が酒に酔う間にあることは。久しく坐して、ただ愁うるのは、(石が醒酒石で)酒が早く醒めてしまうことだ。

故事を用いるのに數種の方法がある。ひそかに用いて、その故事に頼らない「暗用」という方法が、最も良く、しかも最も難しい。あたかも諫める方法として、それとなくほのめかすようにするというようなものだ。七八句は、李德裕の醒酒石の事を用いているが、その故事を除外して読んでも、一句の意は、自ら整っている。これは、暗用の手法を自分のものにしていけると言えよう。

○揮觴 さかづきをあげる。酒を飲む。 ○千段 「段」絹織物のこと。 ○一般 一樣。一切。 ○醒酒石 唐の李德裕が愛した酒を醒ます石。

◎故事の用い方を問題にしている。

49 初夏題柏永日新居 (初夏、柏永日の新居に題す)

新卜箇場來結宇 新に箇の場を卜し來て宇を結ぶ

只饒詞客得相從 只だ詞客を饒して相ひ從ふことを得しむ

數莖纔種馴鶯竹 數莖 纔に鶯を馴しむる竹を種え

一樹更添棲鶴松 一樹 更に鶴を棲しむる松を添ふ

蒲榻風清時夢句 蒲榻 風清くして 時に句を夢み

板檐雨過夜聞鐘 板檐 雨過て 夜 鐘を聞く

吟情休恨芳渾盡 吟情 恨ることを休めよ 芳 渾て盡ることを

満處緑陰追日濃 満處の緑陰 日を追って濃なり

人或駁棲雀之虚誕。正興曰、松之可移者非大樹固不待言也。棲雀是望之将来者取以形容之。何害之有。

人、或は棲雀の虚誕を駁さん。正興、曰く「松の移すべき者は大樹に非ざること、固より言を待たざるなり。雀の棲む、是れ之を将来に望む者を取て以て之を形容す。何の害か之れ有らん」と。

【訳文】新たに土地の良し悪しを見て、ここに庵を結んだ。ただ詩人だけが、ここを訪ねてにぎわすことができる。やつと竹を数茎植えて鶯が馴れてすむようになり、更に松の一本を添えて植え鶴を棲ませるようになった。蒲の長椅子に坐れば、風が清らかで、時に句を夢みたり、板の軒で、雨をやり過ごして、夜に鐘の音を聞いたりする。詩情が失せると恨むことはない、花の香りが全て尽きてしまっても。土地いっぱい緑陰は、日を追って濃くなっていくのだから。

或いは鶴が棲むということがおおげさだと反駁しようとする人がいるかもしれない。正興がいうには「移植できる松は大樹ではないことは、もとより言うまでもないことである。鶴が棲むのは、これを将来に期待するというのでこれを形容したのである。何の問題が

あろうか」と。

○柏永日新居 永日は柏木如亭の字。寛政五年刊行とされる『木工集』に「新居作」「移居」がある。○新卜「卜居」(土地のよし

あしを占つて家を新築する) ○數茎纒種馴鶯竹 『木工集』に「洗竹」詩がある。如亭の別号は瘦竹であり、何か寓するところがあるかもしれない。○蒲榻 「蒲」がま。葦を編んでむしろや敷物にする。

○夜聞鐘 どの鐘か。○恨 「恨」むる(上二段、む(四段)、みる(上一段)など活用にゆれがある。○駁 反論する。○虚誕 でたらめ。いつわり。

◎詩の表現を理屈で解そうということに対する批判になっている。

50 石子亭村居分得江韻

蓬門瀟酒傍清江 蓬門 瀟酒として 清江に傍ふ

名姓何妨喚做龐 名姓 何ぞ妨ん 龐と喚做すことを

種竹新移看月榻 竹を種て新に月を看るの榻を移し

穿池故置玩魚缸 池を穿て故らに魚を玩する缸を置く

閒持石譜立砂砌 閒に石譜を持して砂砌に立ち

又讀農書坐紙窗 又 農書を讀て 紙窗に坐す

妻子能諳田圃事 妻子 能く田圃の事を諳じ

棟風梅雨話耕糞 棟風 梅雨に耕糞を話る

【訳文】隠者らしい門は、こざっぱりとして、清らかな江に沿って立つ

ている。名前を、理想的隠者の龐徳公と呼んでもいいくらいだ。新たに、竹を植えて月を見るための長椅子を移して、わざわざ、池を掘って魚を弄するための飛び石を置いた。静かに、石の図譜を持って砂砌に立って（考えをめぐらし）、また、農事の書を読んで障子の書齋に坐して（学ぶ）。妻子も、田圃の事に熟達して、棟に吹く風、梅を熟す雨ごとに、耕作の話をしている。

○石子亭 小金井桜樹碑に見える大久保狭南の娘婿の石永貞（石子亭）。『杉田紀行』などの著書がある。 ○蓬門 貧家。隠者の居。石子亭の村居であれば、小金井村か。 ○清江 玉川上水か。 ○龐 龐徳公。後漢末、襄陽の人。劉表がたびたび召そうとしたが応ぜず、妻子を伴って鹿門山に登り、葉草を採取して一生を送った。79詩にも。 ○缸 水中のとびいし。いしばし。 ○石譜 石の品目を序に従って列記したもの。

51 酒醒

口渴神驚夢亦回 口 渴し 神 驚きて 夢も亦た回る
彎々落月在庭梅 彎々たる落月 庭梅に在り
人情非會醉中趣 人情 醉中の趣を會するに非んば
風味爭知水一杯 風味 争でか知らん 水一杯

新奇 新奇なり。

【訳文】喉が渴いて、心もはつとして、夢もまた覚めてしまった。弓のように曲がった沈みかけの月が、庭の梅にかかっている。人情として、酔っぱらった最中の趣を理解しているのでなくては、どうしてわかるうか、この水一杯の風味を。

詩として（こうした素材や手法は）新奇である。

○神驚 「驚心」心を驚かす。 ○彎々落月 西の空に沈みかかった月。時間の経過を示す。

◎後のものだが、川柳、例えば、「酔い醒めの水千両に直が極り」「誹風柳多留」百三十二篇（天保五年刊）など類想句が多い。

◎評文は「新奇」としかないが、原本の転結に圈点が付されるので川柳などの世界を取り入れたのが新奇であるというのであろう。

52 立秋

稚來聊覺葛衣輕 稚來 聊か覺ゆ 葛衣の軽さを
靜聽風從庭樹生 靜に聴く 風の庭樹より生ずるを
堂下有聲前日水 堂下 聲有り 前日の水
今朝何事故關情 今朝 何事ぞ 故らに情に關る

【訳文】秋になって、やや夏衣の軽さを感じ、静かに風が庭の樹か

ら生じるのを聴いている。堂下では、前日までの夏と同じ水の音がしているが立秋の今朝は、なぜかそれが特に気にかかる。

◎次の53詩の評に「以上二詩、能く人の言ひ難きを言ふ」とあり、転結に圈点がある。

53 即事

曾向春風醉晚霞 曾て春風に向て 晚霞に酔ひしに

已看秋暑曝絲紗 已に看る 秋暑に絲紗を曝すを

檐前時取青幃展 檐前 時に青幃を取て展れば

點落芳園舊日花 點落す 芳園 舊日の花

以上二詩能言人難言者。 以上二詩、能く人の言ひ難きを言ふ者なり。

【訳文】 ちよつと前に春風の吹く中、夕映えのもとに酔つたと思つたら、もう残暑の中を糸を曝すのを見る時期になつてしまった。軒先で、時に蚊帳を取つてひろげてみると、はらはらと、花盛りの庭で当時咲いていた花びらが落ちてくるのであつた。

以上の二詩は、他人が言えないところをうまく表現したものである。

○曾く已く ちよつと前にしたらしくもうくである。 ○晚霞 ゆう

ばえ。 ○秋暑 残暑。 ○曝絲紗「紗」は麻や綿をほぐしてあら

くすいた糸。うすぎぬ。 ○青幃 青い帷幕。蚊帳を指す。 ○點

落 はらはらと落ちる。 ○芳園 花が多くてよい香のするその。

李白の「春夜宴桃李園序」に「会桃李之芳園」がある。

54 次海君玉夏日園中雜詠韻

(海君玉の「夏日園中雜詠」の韻に次す)

脩篁一塢新添翠 脩篁 一塢 新に翠を添へ

幽致誰憐在此中 幽致 誰れか憐む 此の中に在ることを

邀月伴僧清處去 月を邀へ僧を伴て清き處に去る

不知身入畫屏風 知らず 身は畫屏風に入ることを

右竹塢

【訳文】 海君玉の「夏日園中雜詠」という詩に次韻した。

背の高い竹が堤いっぱいに、新たに緑を豊かに添えた。誰があじわうのだからか、この中に在る幽やかなおもむきを(それは貴方である)。月を迎え、僧を伴つて、清らかなところに行くと、身が屏風絵の中に入っているということに自分では気づきもしないのだ。

右は「竹の堤」の詩。

○海君玉 20・70詩参照。 ○夏日園中雜詠 『詩聖堂詩話』19話に

海君玉の「夏日田園」がある。韻字は異なる。○脩篁 ながい竹。
○幽致 奥深く静かなおもむき。○竹塙 竹の茂っている堤。王維の『罔川集』などに做って、海君玉の屋敷にそう名づける場所があったのであろう。

55 その2

興饒還識作吟遲 興 饒くして 還て識る 吟を作すの遅きを
久立槐陰覺緑滋 久しく槐陰に立て 緑の滋きを覺ゆ
欲染詩箋拾花得 詩箋を染めんと欲して花を拾ひ得て
石爐火底淪多時 石爐火底 淪ること多時

右槐邊

【訳文】興が豊かだと、かえって詩を作るのが遅くなるのがわかった。久しく、槐樹の陰で緑の繁茂しているのを感じながら立っている。詩箋を染めようとして、花びらを拾って、石の炉の火で長いこと煮ているのだ。

右は「槐の辺り」の詩である。

○饒 ゆたか。おおい。あり余るほど多い。○染詩箋 槐の花や蓄は黄色の染料として用いるという。○淪 ひたす。ゆでる。

56 冬夜

小門閨寂無人叩 小門 閨寂として 人の叩く無く
獨倚吟床占静閑 獨り吟床に倚て 静閑を占む
怕折梅花聞雪睡 梅花を折らんことを怕れて 雪を聞て睡る
冷魂一夜遶孤山 冷魂一夜 孤山を遶る

【訳文】小さな門は、しんとしてもの寂しく、門を叩く人もない。詩作の机によりかかって、静けさを独占している。雪が梅花を折ってしまうことを恐れて、雪の音を聞きながら眠ったら、冷え切った心は一晩中、夢で梅の名所の孤山を廻っていたようだ。

○閨寂 ゲキセキ。しんとして物さびしく静かなこと。○孤山 中国の梅の名所。孤山に隠棲した林逋の「山園小梅」詩がある。また、『聯珠詩格』周南峰「梅」に「夢随烟雨繞孤山」の句がある。

57 冬日集寫山樓

君家諸子姪 君が家の諸子姪
閑雅有文才 閑雅にして文才有り
行酒香添炷 酒を行し 香 炷を添へ
賦詩琴拂埃 詩を賦し 琴 埃を拂ふ
輕風一欄竹 輕風 一欄の竹
低日半窓梅 低日 半窓の梅
醉後知多興 醉後 知んぬ 興多きことを

青山寫磊鬼 青山 磊鬼を寫す

一二得杜工部體。 一二、杜工部の體を得たり。

どは、季節で変わらぬ画中の風景であろう。

58 送那可公雅歸秋田

(那可公雅の秋田に歸るを送る)

行路在何處 行路 何の處にか在らん

亂山高下中 亂山 高下の中

當霄縱聽鹿 霄に當て 縦ひ鹿を聴くとも

侵曉莫逢熊 曉を侵して 熊に逢ふこと莫かれ

雲冷亭前月 雲は冷やかなり 亭前の月

霜寒馬上風 霜は寒し 馬上の風

長途不可厭 長途 厭ふべからず

數間賣醪翁 數ば間へ 醪を賣る翁

た画中の風景だったのだ。

一二句は、杜甫のスタイルを会得している。

○寫山樓 谷文晁の居。その詩会などであろう。 ○諸子姪 谷一

族の人々。父に谷麓谷、妻に幹々、弟に元旦、妹に舜瑛・紅藍、子

に文一・文二などみな詩画で知られていた。その場に居合わせたの

であろう。 ○行酒 酒を酌んで客に奉ずる。酒の酌をする。行觴。

○炷 香のいくゆり。香の単位。「炷香」香をたく。 ○青山 青々

として見える山。 ○磊鬼 高大なさま。 ○青山寫磊鬼 寫山樓

に因んで言った。 ○杜工部體 杜甫の詩風。杜甫の「示姪佐」「嗣

宗諸子姪、早覺仲容賢。」などを指すか。

◎詩題にわざわざ「冬日」とあるので「輕風」「竹」「梅」「青山」な

【訳文】 那可公雅が秋田に歸るのを送る

行くべき道は、いつたいこの乱立する山々が、高かったり低かった

りする中の、どこにあるのだろうか。宵のうちに、たとえ鹿の声を

聴くことがあっても、曉のころ早立ちして、熊に逢ふことのないよ

うに。宿場で見上げれば、冷やかな雲の間に月がかかり、馬上では、

寒い霜を含んだ風が吹き付けるだろう。長い道のりを、厭うことは

ない。どこへ行っても、どぶろくを売る翁でも訪ねるがいい。

○那可公雅 「那可公雅は秋田藩士で、『幼公遺草』では、那可通博

とあつた人物である。『秋田人名辞典』には、寛政五年七月、藩校明道館の勤番支配となつたとあり、この詩はその折の旅立ちを送つた時のものか。」という（『江戸詩歌論』）。○亭 やどり。宿場。
◎ここには評がないが、47詩の評で格調派的な送別詩を否定している。五六句に圈点はある。

59 歳暮（予時在品川）

寒威欲深夜 寒威 深夜ならんと欲す
昨雪徹窓明 昨雪 窓に徹して明なり
松凍風無響 松 凍て 風に響き無し
蘆荒月有聲 蘆 荒て 月に聲有り
所交皆是俗 交はる所 皆な是れ俗
求句總關情 句を求めば 總て情に關る
聊堪慰此生 聊か此の生を慰するに堪へたり

【訳文】寒威が増してきて、夜も更けようとしている。昨晚の雪が窓を貫くように（冷たく）明るい。松は凍つて、風が吹いても響くことも無く、蘆は荒れて、月に照らされて（風の）音をたてる。交わる人々は、みな俗人であるが、詩句を考える時は、すべて雅情にかかわる。たまたま陶淵明の詩集を手にとつて読んだので、いくらかこの生活を慰めることができた。

○徹窓明 雪明かりが窓を透して明るい。○松凍風無響 松濤のこと。○關情 心にかかる。関心。○偶取陶詩讀、聊堪慰此生 陶淵明「飲酒其七」に「嘯傲東軒下、聊復得此生。」とある。

60 高輪作

參差西岸樹 參差たる西岸の樹
海點晚雲涼 海は晚雲を點じて涼し
高鳥沈寒影 高鳥 寒影を沈め
遠帆餘夕陽 遠帆 夕陽を餘す
潮鳴風欲起 潮 鳴て 風 起んと欲す
花盡土猶香 花 盡て 土 猶ほ香し
倘惜三春景 倘し 三春の景を惜まば
無如入醉郷 醉郷に入るに如くは無し

【訳文】西の岸辺の樹は、長短入り交じつて、（その向こうに見える）海は、晩の雲を映じて涼しげである。高く飛ぶ鳥は、寒そうな影を海の彼方に沈めたが、遠くの帆掛け船には、まだ夕日があたつている。潮鳴りがするのは、風が起きる前兆である。しかし、花はすっかり尽きていて、土にまだ香しい花の香りが残る。もし、春の風景を惜しむのであれば、酒を飲んで酔郷に入つてしまふのに勝ることはない。

○参差 長短入り交じっていつしよになっているさま。 ○寒影 寒そうな影。 ○潮鳴風欲起 1詩「新窓夜半聞潮落」、5詩「潮來吞缺岸」の句がある。 ○偷 儻(もし)と同じ。 ○惜 原本「惜ハ」 ○醉郷 王績の「醉郷記」による語。酒飲みのみ。

61 綾瀬納涼

咎陰時正午 咎陰 時に正午
潮落廣汀洲 潮 落て 汀洲廣し
鷺外沙多跡 鷺外 沙に跡多く
鷗邊水不流 鷗邊 水 流れず
醉濃因酒美 醉の濃なるは酒の美なるに因り
話少杖吟稠 話の少なるは吟の稠きに杖る
且喜涼風足 且つ喜ぶ 涼風 足ることを
何須勞扇頭 何ぞ須ん 扇頭を勞することを

【訳文】 岸辺の陰は、正午の時をしめし、潮はすっかり引いて、汀の洲が広くなっている。鷺のいる遠くの辺りは、砂に足跡が多く残り、鷗のいる近くの辺りは、水の流れもない。酔いが深いのは、酒が旨いからであり、話の少ないのは、詩作が豊かだからだ。また、喜ばしいのは、涼やかな風が十分なことだ。どうして扇を忙しく動かす必要があるのか。

○綾瀬 現在の足立区綾瀬。海・川に近い。 ○咎 キユウ。おか。皋に通ずる。 ○杖 よる。たよる。 ○扇頭 おうぎの先。扇そのもの。

62 村居

石鼎烹茶圍地爐 石鼎 茶を烹て 地爐を圍む
有時或被短筇扶 時有て 或は短筇に扶けらる
簷前翠壓山三面 簷前 翠は壓す 山三面
窓外香傳梅一株 窓外 香は傳ふ 梅一株
犬守柴門曾吠客 犬は柴門を守て曾て客を吠へ
雞迴瓦砌故將雛 雞は瓦砌を迴て故らに雛を將ゆ
閒丘靜壑元無主 閒丘靜壑 元と主無し
天老饒吾養病軀 天老 吾を饒して 病軀を養しむ

天老字拈得即好。 「天老」の字、拈し得て即ち好し。
【訳文】 地面に掘った炉を囲み、石の鼎で茶を煮る。時には、あるいは短かい杖に頼って散歩する。軒先には三面の山の緑が圧倒するように迫り、窓の外から梅一株の香が伝わってくる。犬はかつて客を吠へて、粗末な柴の門を守り、雞はわざわざ雛を率いて、瓦の踏み石をまわる。静かな丘や谷には、もともと主は無いが、天老が私に恵みを与えて、病体を養わせてくれるのだ。

「天老」の字は、うまくひねってよい。

○石鼎 石のかなえ。 ○地爐 地下に設けた暖炉（宋京蕭「地爐

茶鼎剽声」）。 ○有時 時々。時には。 ○曾 底本の送り仮名が「曾

テ」あるいは「曾チ」（すなはち）で判読できなかった。 ○犬ノ雞

理想郷を思わせる景物で、老子に「雞犬之聲相聞、民至老死不相往來。」

陶淵明「桃花源記」に「阡陌交通、雞犬相聞。」などがある。 ○

天老 上古の人。宰相。 ○饒 豊かにしてくれて、恵んでくれる。

○拈得 デン・ネン。ひねって。

63 懷狂土故人（予時在常陸）

辭去繁華返舊溪 繁華を辭し去て 舊溪に返る

較知風物不能齊 較らかに知る 風物の齊きこと能はざるを

白梅二月纔將破 白梅 二月 纔に將に破んとす

黃鳥三春猶未啼 黃鳥 三春 猶ほ未だ啼かず

一水浮烟山漠々 一水の浮烟 山 漠々

滿村過雨麥萋々 滿村の過雨 麥 萋々

尋思江上親詩友 尋思す 江上の親詩友

月夕花晨分品題 月夕花晨 品題を分つことを

後聯高格渾成偽調之徒固無論。今世乘詩風之變者亦或安卑俗而不知之。

後聯、高格渾成。偽調の徒、固より論無し。今世、詩風の變に乗ずる者も亦た或は卑俗に安んじて之を知らず。

【訳文】繁華な江戸を辭し去って、故郷の溪に帰っている。よくわかる、季節の風景が同じではありえないことを。白梅は二月になって、やつと蕾が開こうとしているし、鶯は、春だというのに未だに鳴かない。一筋の川の流れに浮かぶもやは、山にはてしなくひろがり、村中の通り雨で、麦はいっせいに茂ってきた。たえず思っているのは、江戸で親しい詩友たちと、月の夕べといい、花の朝といい、題を分けて詩作したことだ。

後聯は、格調高く自然に出来ている。偽唐詩の徒は、もとより論外だが、最近の、（格調から性靈という）詩風の変化に乗じた者もまたあるいは卑俗な表現でよしとして、こうした表現を知らない。

○懷狂土故人 「常陸の大久保村に帰省した時、江戸の友人を懐かしんだ詩である。詩の内容から季節は春。」という（『江戸詩歌論』）。

○較 比較すると明らかに。 ○風物 風景。 ○浮烟 水面に

ただようもや。 ○萋々 セイセイ。いっせいにしげる。 ○尋思

心を沈めて思考する。たえず思索する。 ○江上 川のほとり。江戸。

○渾成 自然にまともまっていること。

64 小春郊行

出盡丘陵又水涯 丘陵を出で盡せば 又 水涯

一雙不借爛晴沙 一雙の不借^{かし} 晴沙に爛る

寒林得句行取葉 寒林 句を得て 行くゆく葉を収ひ

暖岸尋春立數花 暖岸 春を尋て 立ちて花を數ふ

蘆荻深中思泛艇 蘆荻 深き中 艇を泛べんことを思ひ

松筠老處想移家 松筠 老る處 家を移さんことを想ふ

歸來乘興何嫌晚 歸來 興に乗じて 何ぞ晚きを嫌はん

猶有西郊酒可賒 猶ほ西郊の酒の賒るべき有り

【訳文】丘陵地を出てしまうと、今度は水辺だ。一組の草履は、晴れた日に当たった砂で爛れるようだ。寂しくなった林では、歩きながら葉を拾って、詩句を得て、暖かい岸辺では、立ちつくして花を数え、春の面影を尋ねる。蘆や荻が茂る中に、舟を浮かべてみたいと思ひ、また松や竹の鬱蒼とするところに、家を移してみたいと思う。興が乘れば、帰りの遅くなるのをどうしていいとおうか。また、秋の野辺では酒を売っているところがあるのだ。

○小春 陰曆十月の異称。 ○水涯 岸水ぎわ。 ○不借 フシヤ。草履の異名。人に貸さないとところからいう。 ○借 底本「日」の部分「月」、60詩にも「借」が「月」の例。 ○寒林 葉が落ちて寒々とした冬の林。 ○松筠 松と竹。転じて変わることをの

節操の喩え。 ○西郊 15詩参照。 ○酒可賒 「賒酒」シャシユ。酒をかけて買う。

65 雪

素影難分日已沈 素影 分け難し 日に沈むことを

間窓只向碧筒斟 間窓 只だ碧筒に向て斟む

一群輕鷺迷孤島 一群の輕鷺 孤島に迷ひ

數點寒鴉認舊林 數點の寒鴉 舊林を認む

竹樹放聲初識重 竹樹 聲を放て 初て重きを識り

潮痕無色亦應深 潮痕 色 無けれども亦た應に深かるべし

醉來靜聽柴門外 醉來 靜に聴く 柴門の外

獨立何人乘興吟 獨立 何の人も興に乗じて吟ずる

【訳文】白い雪明かりで、日がすでに沈んだのかどうかわからないほどだ。静かな窓のもと、ただ池の蓮の葉で酒を酌んでいる。一群の軽やかな鷺が、池の孤島で降りるのに迷ひ、数羽の寒鴉は、なじみの林に気づいたようだ。(雪が落ちて) 竹や樹が音を立てるので、やと雪の重きがわかり、雪が深く積もり潮の痕は色も残っていないだろう。酔っては、静かに柴の門の外に耳をこらす。独り俗から離れて、誰かが興に乗じて吟じてはいないかと。

○素影 しろいかげ。月のかげ。 ○間窓 閑窓。ものしずかな窓。

○碧筒 みどりのくだ。三国魏の鄭公は夏日、客を宴し、荷葉を杯として酒を盛り、莖の孔から吸ったという。○輕鷺 輕鷺の語は見当たらないが、「輕鷗」「輕禽」などと同じく鳥の輕快な様子である。

○竹樹 竹林と樹木。○獨立 俗世間の外にあること。

◎八句目の門前まで来た人は、次の詩と同じく「雪夜訪戴」(世説新語)の故事を連想させる。

66 溪興

霜染楓林菱半枯 霜 楓林を染て 菱 半ば枯る

扁舟載月趣清孤 扁舟 月を載て 趣 清孤

此遊莫使世人識 此の遊 世人をして識らしむること莫かれ
誤寫秋溪訪戴圖 誤て寫さん 秋溪 戴を訪ぬるの圖

【訳文】寒気が楓林を紅葉させて、菱は半ば枯れてきた。いつしよに月を載せるように小舟を浮かべれば、清らからで孤高の趣きだ。この遊覧を、世間の人に知らせてはいけない。秋の谷川なのに、まちがって雪夜に戴を訪ぬるの図を描いてしまうから。

○清孤 「孤清」孤高を守り清潔なこと。○誤寫秋溪 もとは冬の話しである。○訪 底本の送り仮名。「訪ロウ」○訪戴圖 晋・王徽之が雪の夜に戴逵が剡溪にいるを憶い、門前まで来たが、興が尽きて帰ったという故事を画にしたもの。

◎故事の使用法。季節の違いを利用した。
67 怨詞

淚痕無語乾無暇 淚痕 語無く乾くに暇無し

獨夜沈々思且重 獨夜沈々として 思ひ且つ重なる

夢覺還求夢中事 夢 覺て 還て夢中の事を求むれば
五更又報自鳴鐘 五更 又 報ず 自鳴鐘

【訳文】涙の痕は乾く間もなく、言葉も無い。独りの夜はしめやかにふけていき、その上に思いは心にかさなっていく。夢が覚めて、また夢の中の出来事を考えていると、また、時計の鐘の音がもう五更だと報じている。

○且 その上に。○重 かさなる。○五更又報 夢の中に戻りたいのに。○自鳴鐘 時計。

68 早起

露眠草樹未全醒 露に眠る草樹 未だ全くは醒めず

一片冷雲環小亭 一片の冷雲 小亭を環る

汲取井花先滌硯 井花を汲み取て 先つ硯を滌ひ

窓前間寫大玄經 窓前 間に寫す 大玄經

半上落下詩。 半ば上り、落下の詩。

【訳文】露に濡れて眠っている草や樹もまだ全くは醒めていないが、一片の冷やかな雲が、小さな亭を取りまいている。井戸の一番水を汲み取って、まず硯を洗い、窓近くで、静かに『大玄経』を書写する。途中まではいいが、結局は下の詩である。

○井花 「井華」朝、最初に汲んだ井戸水。此の水を用いれば顔色を良くするという。 ○大玄経 十卷。漢、揚雄撰。易に擬して作る。

○半上落下詩 評意不明。漢・揚雄『大玄経』が『易経』を真似た著作なので、その評価から「落下」と言ったか。

69 美人宿醉

潮紅半退含情立 潮紅 半ば退て 情を含んで立つ
自是窈窕醉海棠 自らは是れ 窈窕たる醉海棠
将向花前求露飲 将に花前に向て露を求めて飲まんとす
侍兒時送蛤蜊湯 侍兒 時に送る 蛤蜊湯

【訳文】酔って赤みが注した頬の紅も、半ば褪せて、思いを含んで立っているところは、自のずから、海棠の花がなまめかしく酔っているようだ。まさにその花の前で美人は酔い醒ましに露の水を求めて飲むとしてゐる。時に、侍女が浅蜊と蛤の汁を持ってきた。

○宿醉 二日酔い。 ○潮紅 あか色を呈する。(范成大『崇寧紅詩』「…晚來醉面潮紅」) ○窈窕 女嬀のおくゆかしく上品なさま「關關雉鳴、在河之洲。窈窕淑女、君子好求。」『詩經』「周南・關雎」、なまめかしいさま。 ○醉海棠 「海棠睡未足」美人の目覚めたばかりで眠り足らず、なよなよと弱々しく見えることをいう(唐書・楊貴妃伝)。酒を飲んだあとの姿。 ○蛤蜊湯 蛤とアサリの汁。二日酔いに効果があるという。

70 海君玉席上同柏永日内田讓卿分山水花竹書画酒茶字為韻各賦二絶 (海君玉の席上、柏永日・内田讓卿と同じく「山水花竹書画酒茶字」を分て韻と為す。各の二絶を賦す。)

心在雲嵐身未間 心 雲嵐に在て 身 未だ間ならず
小園為置石犀顔 小園 為に置く 石犀顔
一霄尼得遊僧宿 一霄 遊僧を尼め得て宿せしむ
話盡羽山兼奥山 話し盡す 羽山と奥山と

本邦火宅行脚僧投宿於民家動輒説奥羽諸山之妖恠。以欺愚夫愚婦。此首示夏人乃不知也。以邦人觀之不免俗趣。

本邦の火宅行脚僧、民家に投宿し、動もすれば輒ち奥羽諸山の妖恠を説く。以て愚夫愚婦を欺く。此の首、夏人に示せば乃ち知らざる

なり。邦人を以て之を觀れば、俗趣を免れず。

【訳文】海野蠅齋の詩会で、柏木如亭・内田讓卿とともに「山水花竹書画酒茶字」の八字を分けて韻脚として、四人それぞれ絶句二首を作った。

心は山気の中にありながら、身はまだ（市中にいて）閑ではない。そのため小さな庭には険しい山を模した石を置いてみた。その上さらに、ある晩などは、遊行僧を留めて宿らせて、廻ってきたという奥羽の山々の様子を話し尽くしてもらった。

我が国の火宅を行脚する僧侶は、民家に宿を借り、どうかするとすぐ、奥羽諸山にいくという妖怪を説く。そして、愚夫愚婦を欺くのだ。この詩は、中国人に見せれば理解できないだろうし、日本人がこれを見れば、俗な趣向であるのを免れない。

○海君玉 海野蠅齋。20・54詩参照。 ○柏永日 柏木如亭の『木工集』にそれらしき詩はない。 ○内田讓卿 未詳。『莫蘭稿甲集』の山水緑陰の詩題にも出る。 ○山水花竹書画酒茶 八字を四人で分けて、詩佛は「山水」の二字を受け持った。一首目は「山」、二首目は「水」である。 ○雲嵐 雲のようにただよう山気。 ○孱顔 センガン。山の高く峻しいさま。 ○火宅 火宅煩惱の多い俗界。火宅僧は、

肉食妻帯の僧侶をいう。 ○動輒 「動輒」は、「ややもすればすなわち」と読み、「どうかするとすぐに」 ○夏人 中国人。

◎日本の素材を積極的に取り上げる詩佛と否定する素堂のちがいが出ている。中国人に理解できるか、が一つの争点になっている。

71 その2

臥病無為過日子 臥病 為すこと無くして 日子を過す
小齋雲冷依寒被 小齋 雲 冷て 寒被に依る
近来愛澹怯茶嚴 近来 澹を愛して 茶の嚴なるを怯る
手製一瓶甘爛水 手づから製す 一瓶の甘爛水

【訳文】病に臥せって、できることも無く、月日を過している。雲は冷やかで、自分の書齋で冬用の布団にくるまっている。近ごろ、淡いのが好みで、茶の濃いのは苦手だ。手づから（茶を入れるのによいという）甘爛水なるものを一瓶ばかり作ってみた。

○日子 ひにち。年月日。 ○茶嚴 「嚴茶」濃い茶。 ○甘爛水 「傷寒論」にあり、軟水で葉を煎じたり茶を入れたりするのにいい水のこと。詩佛は医者の子の出身。

◎俗化した抹茶より文人趣味の煎茶ということか。

72 題益田萬頃書齋

嫩竿移得傍庭隅 嫩竿 移し得て 庭隅に傍ふも

難引鶯兒與鳳雛 引き難し 鶯兒と鳳雛と

且識新窓未成翠 且つ識る 新窓 未だ翠を成さず

取貽脩竹帶風圖 取て貽る 脩竹 風を帶るの圖

【訳文】若い竹を移し植えて、庭の隅に並べてみても、小さな鶯や鳳の雛も来ないようだ。それは、まだ新居は緑でいっぱいではないからなのかわかる。そこで、長い竹が風に吹かれている図を贈ろう。

○益田萬頃 江戸の篆刻家。益田葦齋の字。『詩聖堂詩話』29話「能

く詩を観るの友」と紹介されている。○鳳雛 鳳凰のひな。有望な少年。麒麟児。○取貽 「取」のニュアンスとして、「そのことを好んで自分のものとする。」「取醉」「取暖」と同じとみる。○脩

竹 長い竹。○脩竹帶風圖 詩佛が得意の墨竹画を贈ったのだろう。

73 黄櫻

奇芳別以中央徳 奇芳 別に中央の徳を以て

却王扶桑東海域 却て扶桑東海の域に王たり

唯恐春深月更清 唯だ恐る 春深くして 月 更に清きことを

滿庭黃雪澹無色 滿庭 黃雪 澹として色無し

頗有斧鑿痕。 頗る斧鑿の痕有り。

【訳文】美しい「黄桜」の花、黄色は特別に中央の徳を持っていると言われているが、逆に東海の国、日本で盛んに咲いている。ただ恐れるのは、晩春のころ、月が非常に清らかなとき、庭中の、黄いろい雪のような花が、(月の光と重なって) 淡く色が見えなくなってしまうことだ。

やや技巧を弄したあとが見える。

○黄櫻 黄桜。サクラの一品種。花は八重で、樺茶または鬱金色。「御衣黄」などがある。○中央徳 黄色は五色のひとつで五方(東西南北と中央)では中央、五行では土色。地上の支配者、皇帝の色。高貴な色。○却 中央なのに逆に東海で、の意。○黄雪 黄色の雪。桂の花。月にあるとされる。○斧鑿痕 おの・のみを用いて小細工をしたあと。詩文では技巧を凝らしたあと。

74 題画

亭上有人臨水坐 亭上 人有り 水に臨て坐す

欲交一語更無由 一語を交へんと欲すれども 更に由無し

扁舟亦識到不得 扁舟 亦た識る 到り得ざらんことを

恠石奇松自一丘 恠石奇松 自ら一丘

【訳文】亭のほとりに人がいて、川に臨んで坐している。言葉を変わそうとしても、いつこうにきつかけがない。(画中の乗り捨てられた)小舟からも、そこに到ることができないのがよくわかる。怪しい岩石や奇怪な松に囲まれた世界は、自から一つの俗外境をなしているのだ。

○亭上有人 画中の人物である。 ○更無由 言葉を交わせないのは画中の人物だから。 ○亦識到不得 画中にも亭のあるところまで至らない俗な世界も描かれているのであろう。 ○一丘 「一丘一壑」一つのおかひとつの谷でもまんどくすれば楽しめるということで、身を俗外に置いて風流を楽しむこと。

◎絵画自体としてひとつの俗外の世界をなしている。

75 歸途口號

松杉月淡影難真 松杉 月淡くして 影 真なり難く
一犬寥寥吠醉人 一犬 寥寥として 醉人を吠ゆ
類壁隔溪誰所住 類壁 溪を隔つ 誰れか住する所ぞ
糠燈光漏覺家貧 糠燈 光漏て 家の貧しきを覺ゆ

【訳文】松や杉から漏れる月の光は淡く、影もはっきりせずばんやりとし、犬が一匹、ひっそりと酔っぱらい(の私)を吠えるくらいだ。谷川を隔てて見える、類れかけた壁の家は、誰が住んでいるのやら。

安い糠油の灯の光が漏れて、その家の貧しさが思われる。

○口號 詩の様式の一つ。文字に書かず、心に思いうかぶままに直ちに詠じられた詩。 ○寥寥 うつろで、ひっそり。 ○糠燈 ともしびの一種。貧家で用いる。

76 送中野子興遊熱海温泉遂歸勢州

(中野子興の熱海温泉に遊び、遂に勢州に歸るを送る。)

偏識團樂易過春 偏に識る 團樂して春を過し易きことを

無端復作異鄉人 端無くも復た異郷の人と作る

如今別去雲千段 如今 別れ去れば 雲千段

他日相思月一輪 他日 相思はば 月一輪

綠野尋花曾至寺 綠野 花を尋て曾て寺に至り

(看櫻至品川來福西向諸寺)

(櫻を見る。品川、來福・西向諸寺に至る。)

碧窗品句又分茵 碧窗 句を品して 又 茵を分つ

(時臭蘭甲集成。同會奚疑塾評論判議。)

(時に『臭蘭甲集』成る。同じく奚疑塾に會し評論判議す。)

温泉啻療舊來病 温泉 啻だ舊來の病を療するのみならんや

兼洗詩腸吐斬新 兼て詩腸を洗て 斬新を吐かん

【訳文】中野子興が熱海温泉に旅して、結局、伊勢に歸るを送る。

ひたすらわかった、楽しい円居をすると春などすぐ過ぎてしまうことが。思いがけずも、再び別の郷の人となることになった。ただいま別れて去ってしまったら、その間には雲が千も隔て、今度は、同じ月一輪を見て互いに思い出すことだろう。かつて、緑豊かな野を歩いて、花を尋ねて寺に來たし、(桜の花見で、品川の來福寺や西向觀音など諸寺に來た)。碧の紗のある書齋で、詩句を品評したり、また、そのまま布団を分け合って寝てしまったりした。(この時に『貞蘭稿甲集』が刊行された。共に奚疑塾に会合して、作品を評論して編集を判議した。)熱海の温泉に寄るといふことだが、ただ本来の病を療治するだけでいいものか、ついでに詩心を洗って、斬新な詩を吐いてほしいものだ。

卜居集卷之上終

と病。という病。

○勢州 中野素堂の故郷、伊勢。 ○團樂 親しいものの楽しい会合。 ○雲千段 「段」かたまり(李邕・詠雲詩「散作五般色、凝為一段愁」)。 ○緑野 みどりの野。 ○看櫻至品川來福 海賞山來福寺。品川区東大井。『江戸名所図会』に「延命桜：境内、桜樹数株ありてことごとく品を頒てり。弥生の花盛りには遠近薫りを慕ひて、ここに遊賞する人少なからず」。 ○西向諸寺 増上寺内、西向觀音か。 ○碧窗 碧紗をかけたまど。山本綠蔭を暗示するか。 ○茵「茵」しとね、しきもの。 ○貞蘭甲集 『貞蘭稿甲集』をさす。北山門下の漢詩アンソロジー。 ○奚疑塾 山本北山の私塾。 ○評論判議 『貞蘭稿甲集』について評論した。 ○舊來病 本来、温泉が効果あ